
とある都市と戯言遣い

いびるじょー

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

とある都市と戯言遣い

【Nコード】

N6989P

【作者名】

いびるじょー

【あらすじ】

哀川潤により学園都市に連れて来られた戯言遣い。
果たして彼はどうなってしまうのか？

始まり

とある路地裏に一人の少年がいた。

「はあ、此処は一体何処なんだろう……。でも、多分というか確実に此処が哀川^{あいかわ}さんの言っていた“学園都市^{がくえんとし}”なんだろうけど、やつぱりそれでも腑に落ちないことがあるんだよな。いや、腑に落ちないというか、何か理不尽な気がするんだよなあ。」

少年は無表情のままだ。しかし、表情に出さないだけで、内心自分をここに送り込んだ張本人、哀川潤^{あいかわじゅん}に少し腹を立てていた。

何故こうなったのだろうか？

多分、原因は昨日にあったのだろうと少年は考える。

以下回想

「なあなあ、いーたん一つ聞いていいか？」

哀川さんは急にそんな話を切り出した。

ついでに言うといーたんとは先ほどの少年、つまり、ぼくのことである。

「何ですか、潤さん。」

「いーたんは超能力が欲しいとは思わないか？」

「そうですね、欲しいとは思いませんけどあったら便利だとは思いますよ。」

ぼくはそう答えた。

しかし、それが間違いだった。

「そうか、なら、いーたんには“学園都市”に行って来て貰うしよう。」

哀川さんは急にそんなことを言い出したかと思うとぼくの脇腹を目にも留まらぬ速さで殴ってきた。
めっさ痛いんですけど。

「な、何のつもりですか潤さん？」

ぼくの質問に哀川さんはニヤリと黒い笑顔を浮かべながら答える。

「拉致。」

おいおい、そりゃねえだろ—————と思いつつぼくの意識は闇に落ちた。

回想終了

で、ここで冒頭に戻るわけである。

脇腹はまだ少し痛むが何かないかと、とりあえずポケットを探ってみることにした。

「まったく哀川さんは——ん？」

右のポケットに何かが入っていた。

メモだ。しかも、やたらとデカイ。というか、コピー用紙なんですけど。

まあ、何か大事なことが書いてあるかもしれないので読んでみる事にした。

『D e r e いーたん

今いーたんのいるところは学園都市という街だ。簡単に言うと学生の街だ。いーたんにはそこでしばらくというか最低三年は生活してもらう。あ、そうそう編入手続きは済ましてあるから“学生”としても生活してもらうからそのつもりで。詳しいことは追々連絡するから頑張ってちょーだい（笑）

そこでは超能力とかあるからびっくりすると思うけどいつも以上に頑張ってね。

P・S・このメモ開けてから三分で意味もなく爆発するから気を付けてね。

B Y 人

類最強の請負人より』

何で爆発させるんですか？というかどうやって？これ普通の紙ですよ？

メモを読み終えたばくは「はぁ・・・。」と先ほどまでの怒りを忘れてため息を漏らしていた。

というか、ここで生活？家は？食事は？お金は？

はぁ・・・、まったく持って

「戯言だよ。」

今この瞬間をもってばくの学園都市での学生生活が決定した。

始まり（後書き）

感想とか貰えると嬉しいです。

詳細

ここに住むことが決定したのはもういいのだが、細かいことが分からないでいた。

ついでに言うと、書いていた通りメモは三分後に爆発した。

どうやったら爆発するのか教えて欲しいんですけど・・・。

今は亡きメモを読み終えてしばらくすると哀川さんから電話が掛かってきた。

『もしもし————いーたん？メモ見た？見たよな？見てなかったら殴るぞ？……まあそれは置いて、本題に入るわ。メモにあった通りそこは”学園都市”と言って八割が学生の街だ。大体230万人くらいか？どうでもいいや。えーと、学生の街と言っても世界中の教育機関を凝縮したようなものだから科学のレベルが笑えるほど高くてな、そのお陰で超能力があつたりするんだよねー。というか、その辺に見たこともないようなロボットが動き回ってるだろ？』

たしかに、ばくの居た所ではお目にかかることの出来ない光景が広がっている。

まあ、そんなことは後でも調べることが出来るのでとりあえず質問してみる。

「あの、一つ聞いていいですか？」

『おう、今は機嫌がいいからなんで聞いていいぞ。まあ悪かったら今すぐそっちに行ってぶん殴っているところだな。』

機嫌が良くてよかった……。と思いつつ今一番聞くべきことを聞いてみた。

「ぼくは何でここにいますか？」

そう、これだ。これが一番気になっていた。

『ああ、それはだなあたしの仕事関係でな……。』

哀川さんの仕事関係？じゃあ何で巻き込んだんだ？ぼくは関係ないじゃないですか……。

息吞んで次の言葉を待つ……。

『あたしの暇潰しだ！』

えええ——！？

「仕事まったく関係ないじゃないですか！新手のいじめですかッ！」

『わりいわりい。まあ、暇潰しつてのは半分冗談で、半分は玖渚^{くなぎさ}ちんからの依頼だ。』

半分は冗談かよ！しかも依頼主は友かよ！！

「因みに依頼内容は？」

『依頼内容はだな、『うにー。潤ちゃん、いーちゃんに手伝ってもらっていいから学園都市内の女子コーの制服集めてきてー。ちなみに経費は僕様ちゃんが持つからね。』だそうだ。』

友――ツ、なんて事してくれたんだ！

というか、友ってばくにこんなことを言うキャラだったけ？

それに友は経費を持つとか絶対に言わないしな。

うん、多分というか十中八九哀川さんの嘘だろう。

「嘘ですよね？」

『ああ、嘘だ。』

やっぱり嘘だった。

「本当の理由は？」

本日二度目だが、息を吞んで待つ。

何だろう、嫌な予感がする。

『正直に言つと仕事二割、暇潰し八割だ。』

ほとんど暇潰しですか・・・。

『まあ、仕事の方はいいーたんを送ったとき、ついでに終わらしたがな。』

おい。

「結局のところ暇潰し以外の意味は無いんですね？」

『ああ、ない。』

まだ仕事の方がよかった気がするのは何故だろう・・・。

十分後

『じゃあな、いいーたん。死ぬなよ？』

「変なこと言わないで下さい。」

ここで会話が終了し、携帯電話をボタンと閉じる。

最終的に哀川さんから聞き出せた情報は、ぼくの住む寮の住所とぼくには戯言遣いらしい超能力があるとか……。早い内に帰る方法探さないと、帰れなくなる気がする。

出会い

ずっとここに居ても仕方がないので寮を目指すことにした。

しかし、ここで問題が発生した。

「ここはどこだ？」

そう、寮の住所が分かっているにもかかわらずどこか分からない。

しかたがないので、近くの人に聞くことにした。

「あのー、すみません。」

「はい。何でしょうか？」

人当たりの良さそうな人に聞いてみたのだが、すごいなこの子。頭の上に花がたくさん咲いている。ファッションなのか？それとも寄生植物か？いや、それはないな……。やっぱりファッションか……。

まあ、そんなことは置いておくとして、この花飾りの少女に寮の場所を聞くことにした。

「この寮ってどこにありますか？」

ぼくは寮の名前と住所の書かれたメモを見せる。

「この寮はですね……、口で説明するのには難しい場所にあるので案内します！」

「ありがとうございます。ええと……、」

「ういはるかざり初春飾利です！あなたのお名前は？」

初春飾利ちゃんか……。頭の上の花飾りは名前に合わせてるのかな？

「あのお、お名前を教えてくださいませんか？」

ああ、名前聞かれてるの忘れてた……。

さて、どう答えたものか……。

まあ、何でもいいか。

「本名は教えられないから、とりあえず『いーちゃん』とか『戯言遣い』とか好きに読んでくれていいよ。」

「わかりました。行きましょうか、いーたんさん！」

この子変な呼び方をするなあ。それに哀川さんと同じ呼び方をするのか……。しかもさん付けで。

いーたんさん付けの組み合わせは不自然極まりない。

別にいいけどね。

寮に向かう道中、こちらに手を振っている少女を発見した。

「おーい、うーいーはーるー。」

「あ、佐天さん。何してるんですか？」

「私は、散歩の途中！初春は？・・・って、おろおろ？そちらの方は？」

お、やっとぼくのことに関がづいたみたいだ。

それに会話から推測すると二人は仲のいい友達のようにだ。

「ええーと、こちらは、詳し」

「ああー！！もしかして・・・、初春の彼氏？」

涙子ちゃんは飾利ちゃんの言葉を遮ったかと思うとアホなことを言い出した。

というか、飾利ちゃんがぼくをどう説明するつもりだったのか気になるな・・・。

それに涙子ちゃんにはどこをどう見たらカップルに見えるか教えていただきたい。

まあ、そんなことを言っても所詮は戯言だけだね。

「な、何てことを言うんですか……。違いますよ!」

飾利ちゃんは顔を赤くしながら否定する。

「えー、初春の彼氏じゃないの?」

「だから、違いますって! いーたんさんから説明して下さい。」

「いーたんさん?」

「はい。この方のあだ名です。」

あだ名ってストレートだなあ。まあいいか。

「初めまして、さくがわ 柵川中学一年の佐天さてん涙子です。初春のクラスメイト兼親友やってます!」

二人とも中学生だったのか……。飾利ちゃんとはかく、涙子ちゃんなみこは高校生に見えなくもない。それに飾利ちゃんせりは子供っぽい服を着たら小学生に見えないこともないだろう。零崎せいきなんか身長は中学生くらいなのに年齢はぼくと同じで19だもんなあ。考えてみれば、ぼくの知り合いは見た目と年齢が合っていない人多くないか? 特に潤さんとか友とか……。なんでだろう?

気にしても仕方がないのでぼくも自己紹介する。

「昨日、この街にやって来た(連れてこられた)戯言遣いだ。ついでに言うと、飾利ちゃんせりみたいにいーちゃんなどのあだ名で呼んで

もらってもかまわない。飾利ちゃんにも言っておくけどぼくに対して敬語は使わなくてもいいよ。」

ぼくは簡単に自己紹介した。

「分かった。よろしくね、いつくん。」

ぼくたちは涙子ちゃんを加えて再び寮へと歩き出した。

途中二人からメールアドレスの交換をしようとせがまれたので渋々交換した。

ぼくの電話帳、女の子ばかりだな・・・。

会話

無事、寮に着けたぼくは二人にお礼を言って自分の部屋に入っていた。

部屋には家具などがきっちり揃っていて、その中でもベッドが何とも言えない高級感を出していて、何故だか眩い感じがした。まあ気にしないで置くとしよう。

ふと、机を見ると何かが置いてあった。

メモか何かだろう。

まあ、このタイミング的には哀川さんからじゃないかな？

しかし、それは哀川さんの置いていったメモなどではなく、二百万円入った通帳と『柵川中学校』への入学許可証だった。

何で中学校？ぼくはこれでも大学生ですよ？

しかも、飾利ちゃんや涙子ちゃんと同じ中学じゃないか。

「傑作だよ……。」

ぼくはこう思うしかなかった。

その日の夜、再び哀川さんから電話が掛かってきた。

「なんですか、哀川さん。」

『いやー、いーたんが無事に寮に着いたか確認をしようと思ってな。』

「ちゃんと、着きましたよ。」

『それならよかった、よかった。』

「ところで潤さん。」

『ん?』

「何で、中学に転校する事になってるんですか!」

『あれ?言ってなかったけ?』

「言ってませんよ。」

『じゃ、今から言っわ。』

「お願いします。」

『気分。』

おい。大学生のぼくは気分で中学に転校する事になったのか? ばれるんじゃないのか?

「ばれるんじゃないですか?」

『あー。それに関してはまったく問題ない。』

「何故です？」

『だって、いーたん背はそこそこあっても大人ぼくないもん。』

「それは何か悲しいです。」

『まあ、気にすんな。』

「気にしますよ。・・・で、理由としては何なんですか？」

『そっちのほう面白いからに決まってんじゃないっ』

「ふざけてるんですか？」

『うん。』

「おい。」

『話し変わるけど、転校、明日からだし。用件はそれだから電話切るぞ。』

「え、ちよつ待っ——」

プツ、ツーツーと単純な電子音がぼくの耳に鳴り響く。

次の言葉を出し終える前に電話は切れた。

こうして、最近のぼくにしては電話での長い会話が終了した。

相変わらずというか、いつも通りだけど自由な人だな。

柵川中の場所が分からないので飾利ちゃんか涙子ちゃんに聞いてみることにしよう。

そう考えているとナイスタイミングで涙子ちゃんから電話来た。

『もっしもーし、いつくん？佐天涙子ちゃんだよーん。』

テンションの高い子だな。絡むのも面倒くさいし少し黙ってしよう。

「……………」

『あれあれ？いつくんであってるよね？』

「……………」

『もしかして私間違えた？どどどうしよう。』

ねえ携帯見たら分かるよね？何でこんなに焦ってるんだろう。
まあ、原因はぼくだけだ。

『し、失礼しましたーっ！では、五秒後に切ります。ごー、よーん、さーん、にー…………』

「いや、間違ってないよ。」

ぼくはカウントダウンを始めてしまった涙子ちゃんにストップをかける。

『え、あつてるの？もう、紛らわしいことしないでよ。本気で間違えちゃったと思って』

滅茶苦茶焦ったじゃない！』

「ははは。ごめんごめん。で、何か用があるんじゃないの？」

『えーとね？先刻のやりとりの所為で忘れちゃった。』

忘れたのかよ・・・。

まあいいや。こちらも用件を言わせて貰おう。

「ねえ、涙子ちゃん。お願いがあるんだけど・・・。」

『何だい？いつくん。』

いつくんいつくん言われるから、なんか巫女子ちゃんみこと会話してる
と錯覚してしまいそうだ。

特に先刻のやり取りなんか巫女子ちゃんの反応とめっさ似てて、内
心ビックリしたくらいだ。

とりあえず、聞いてみる。

「明日柵川中まで一緒に登校していいかな？」

無理だと言われたらどうしよう・・・。何とかなるかな。

しかし、こんな悩みも杞憂に終わり・・・

『いいよー。でも私曰直だから初春に迎えに行って貰うからね。』

あれ？ぼくが一緒にいくことに関してはスルーですか？

うちの中学になんか用ですか？とか聞かないの？

でもきつと飾利ちゃんは疑問に思ってくれるよね？そう信じたい。

何でこの子はこんな軽いノリでオツケー出来るのさ？

中学一年生って色々と怖いというか何か凄い。

もう、考えないという方向で会話を進めていこう。

「うん、わかった。ありがとう」

『いえいえ、どういたしまして。・・・あ、そうそう。今週の土曜
日色々するから空けといてね。』

じゃ、そういうことだから、バイバーイ。』

「うん、じゃあね。」

てか色々って何だろう。学園都市の観光とかだったらいいなあ。

いや、戯言か。まあ何かあっても何とかなるだろうし。

あ、そうそう。最初、哀川さんはぼくを女装させて女子校に送り込
ませて

いつになったらされるか試そうとしていたらしい。

何しようと思んだよ・・・。

というか、近い内に哀川さんの所為で何かが起こるのは間違いないだろう。

ぼくは闇に落ちつつある意識の中でずっと考えていた。

それと、余談なのだが初春ちゃんは朝の六時に迎えに来た。

早えよ。

転校と能力

飾利ちゃんに連れられて柵川中に来たけど、どこにでもあるような普通の建物だった。

ぼくが柵川中を観察していると飾利ちゃんが

「そういえば、いーたんさんはうちの中学に何か用があるんですか？」

と、今更といえば今更なのだが、当たり前前の質問をしてきた。

やっと聞かれたよ……。何か嬉しい気がする。

「ああ、それはね……。ぼくが転校することになったんだ。」

「どこにです？」

いや、話の流れでぼくが此処にいる時点で分かるよね？
何で分かんないのさ……。

「いや、此処に。」

「ここって、柵川中ですか？」

「うん。」

「本当ですかッ!？」

ぼく、さっきから言ってるよね？聞こえてないの？

「うん。」

「はぁ……。ビックリすぎて小さい『っ』がカタカナになってしまいました。」

最早飾利ちゃんの発する言葉の意味が分からない。

「でも、何でなんですか？」

「ぼくをここに連れてきた人の悪戯きづいだよ……。」

そういえば、犯人である哀川さんは三年とか言ってたけど、あの人のことだから

一年もしない内に連れ戻されることになるだろう。確証はないけど。

「でも、いーたんさんは中学生ではないですよね？」

「そうなんだよなあ。一つ聞くけどぼくが中学校に転校つてのは無理があるよね？」

これは是非とも聞いておきたい事だ。

「いや、それは大丈夫だと思いますよ。」

え、何で？

「だって、いーたんさん……。童顔ですから！」

ぐっ、ストレートに童顔って言われると心が折れそうだ。
ぼくってそんなに幼く見えるのかな？
そうだとしたらとても悲しい。

「さあ。行きましょう、いーたんさん！」

ぼくの心が折れかかっている事に気が付かない飾利ちゃんはぼくに
笑顔を向けてくる。

ぼくは諦めて校舎内に入っていた・・・。

それからというものの転入する教室は飾利ちゃんと涙子ちゃんと
一緒にクラスだったこと以外は特に語ることもなかった。

ちなみに涙子ちゃんは当たり前だけどビックリしていた。
先に言っておけば良かったかな・・・。

閑話休題

今は常盤台中学に向かって歩いている。

何故かと言うと能力の数値を測る為だそうだ。
測るだけなら柵川中でもできるのだが、ぼくの能力は何分レベル
が高いため大きな
計測器のある常盤台に行けとのことだそうだ。

ちなみに、飾利ちゃん、涙子ちゃんも一緒だ。
理由としては常盤台の場所が分からない。
ただそれだけだ。

「おい。いつくん着いたよ？」

ああだ、こうだ考えている内にいつの間にか目的の場所である常盤
台中学に着いていた。

あれ？これが中学校？私立大学の間違いじゃないのか？
と、思えるくらい立派な建物がそこにあった。
何でこんなにでかいんだよ……。

話は変わって只今常盤台のプールにいる。

「では、このプールの水に触れて念じてください。」

と、常盤台の先生が言う。

念じろって何を念じればいいのか分からないんだけど……。

とりあえず、適当に戯言遣いらしく『無かったことにした』
と在り得ない事を念じてみる。

すると、プールの水が無くなっていた。

なんで？

『プールの水の消滅までの所要時間約0.05秒。総合評価LEV
EL5』

ええと、どゆこと？消滅？レヴェル5？
訳が分からない。

「どういうことですか？」

ぼくの質問に常盤台の先生が答える。

「簡単に言うとそれがあなたの能力です。」

マジで？本気と書いてマジですか？

「ちなみにどういう能力ですか？」

「分かりません。最初は逆作用の物質かと思いましたが、それならエネルギーが発生するのですがあなたの場合はエネルギーが発生しませんでした。おそらく、事象に作用するものかと思われませんが断定が出来ない為レヴェル5扱いとさせていただきます。」

事象に作用って・・・。

ああ、頭が痛くなってきた。

「はぁ・・・。」

「ちなみに、それが本当なら学園都市初のレヴェル6<神ならぬ身にて天上の意志に
り着くもの>となるでしょう。」

この人が何を言いたいのか分からなくなってきた。

「レヴェル6ねえ・・・。」

まあ、何とかなるだろう。

と、軽く考えながらぼくは寮に帰っていった。

しかし、今のぼくは思ってもいなかっただろう。

みんなを、学園都市を巻き込んだ大事件が起こるということを・・・。

伏線ばく言ってみただけ何にも起きないよね？
何か怖くなってきた。言わなきゃよかったかな・・・。

というか、飾利ちゃんと涙子ちゃん何にもしやべらないから完全に空気と

一体化してるよ……。少し淋しいんだけど。

街案内

ぼくはいま”四人”の女の子といっしょに学園都市を歩き回っている。

何故、四人なのかという説明するのは面倒なので、ざっと朝から今に至るまでを振り返って見ることにしよう。

今日は涙子ちゃんが街案内してくれると言っていた日、つまり土曜日である。

ぼくは飾利ちゃんと涙子ちゃんと三人で歩いている。

「此処が銀行で・・・、」

「あれが病院だよーん。」

「あと、これが・・・」

二人がそこらの建物について説明してくれている時に飾利ちゃんの携帯に

電話が掛かってきた。

会話の内容は聞こえないがおそらく飾利ちゃんの友達だろう。

会話が終わると飾利ちゃんは

「あのですね、いーたんさん。私の友達を紹介してもいいでしょうか？」

と、ぼくに聞いてきた。

ぼくに拒む理由があるわけがないので

「いいよ。」

と、返す。

「じゃあ、公園で待ち合わせらしいので行きましょうか。」

飾利ちゃんはぼくの手を引っ張って行く。

飾利ちゃんの友達かあどんな子だろう。

年下つてのは確定事項だろう。

中学生の友達は中学生か高校生だからな。

でも、どんな子でもキャラは濃そうな気がするのは何故だろう……。

場所は変わって待ち合わせ場所である名前不明の公園。
そこには二人の女子がいた。

「初春〜。こっちですよ〜。」

二人はこちらに気が付くと二人のうち一人が手を振ってきた。

きつと、あの二人が待ち合わせしている飾利ちゃんの友達だろう。

一人は短髪の少女。もう一人はツインテールの少女。

どちらも顔は良いのだが、ツインテールの少女からは危ないに
おいがした。

どれくらいかというとき春日井さんレヴェルだ。

うん、あの子は深く関わらない方が良さな・・・。

ぼくは本能的にそう感じていた。

「えーと、ですね。いーんさん、こちらが昨日能力測定しに行った
常盤台中学の

一年生で私と同じ風紀委員の白井黒子ジャッジメント ちびくろさんです。」

「よろしくですの。ちなみに初春とは風紀委員でコンビを組んでい
ますのよ。」

「で、こちらが常盤台中学二年のエースでいーたんさんと同じ
レヴェル5の御坂美琴みさかみことさんです。」

ふうん。ツインテールの少女こと黒子ちゃんは飾利ちゃんの
風紀委員におけるパートナーか・・・。

ちなみに『風紀委員』『アンチスキル警備員』については
飾利ちゃんから簡単な説明を聞いている。

簡単に言えばどちらも治安維持機関で風紀委員は能力持ちの学生で、警備員は能力を持たない大人で構成されている。

多分この解釈であつてると思う。

そういえば、二人の能力って何だろうか？

美琴ちゃんに限ってはレヴェル5だって言う位だから強いのだろう。黒子ちゃんもレヴェルは分からないが3以上だろう。

何故そんなことが分かるかというとき常盤台中はレヴェル3以上じゃないと貴族でもない

入れないという名門校らしい。

これは前に常盤台に行った時に飾利ちゃんから聞かされたのだ。

まあ、長々と考えても仕方が無いのでぼくも自己紹介するでしょうかな。

「ぼくは本名不明の戯言遣い。好きなように呼んでくれてかまわない。」

「了解ですの。」

「分かったわ。」

飾利ちゃんや涙子ちゃんもだけど何故、本名不明ってことに突っ込まないんだろうか。
本名不明の人がたくさんいるのかな？

そんな訳ないか・・・。

「お互いに自己紹介もしたことですし、いーたんさんの街案内を再開しましょう。」

「レッツゴー。」

考え事をしているぼくを余所に四人は歩き出していた。

本件の主役をほって置いて行っけどうするつもり何だろうか。

いちいち細かいことを気にしては仕方がないのでぼくは先に行ってしまった四人を追って早歩きで着いて行っけ。

で最初の場面に戻るわけである。

いま、ぼくは二人ある二人と会話中である。

まあ、ある二人と言っても美琴ちゃんと黒子ちゃんなのだが。

「さっき、初春さんが言っけたけどあたしと同じレベル5みたいだけど、あんたの能力っけ何なの？」

「さあ？担当の先生は事象に干渉する能力だとか言っけたケド・・・。」

「事象ねえ・・・。」

「ちなみに美琴ちゃんと黒子ちゃん的能力って何なの？」

「わたくしの能力は簡単に言えば空間転移テレポートですの。」

「あたしは、電撃エレクトロマスター使い。簡単に言えば発電能力ね！」

黒子ちゃんがテレポートに美琴ちゃんは電撃ねえ……。

「ちなみに、御坂さんはゲームセンターのコインで超電磁砲レールガンを撃つことだってできるんですよ。」

と、飾利ちゃんが付け足す。

超電磁砲って、化け物かよ……。知らない人もいるだろうがアレが撃てるってことは……。うん、今回も考えることは止めよう。

「見て見て、いつくん。」

と、涙子ちゃんは何かを指差している。

何だろう？と涙子ちゃんの指差している方向を見ると……。

『新しいLEVEL5誕生！名前、本名不明の戯言遣い。能力名『大嘘憑きオールフィクション』。序列第二位。』

本名不明の戯言遣いってばくのことなんだろうけどそのフレーズって知ってる人

少ないはずなだけどなあ。それに本名不明って駄目な気がする。

だれがこんな事を……。

ああ。哀川さんか……。

あの人なら無理難題を何処にでも誰にでも押し付けそうだもんな。
本名がばれないのはいいのだが……。

いや、考えるだけ無駄かもな。

それに大嘘憑きってどこかで聞いたことがあるな。

ええと、何だっけ？

……ああ！思い出した！

この前うちに来たときに置いていったジャンプに掲載されている

めだかボックスっていう漫画に出てきた

くまがわみそぎ
球磨川楔って奴が使っていた能力と同じ名前だ。

あの能力は因果律に干渉する能力だったがたぶん同じものだろう。

これからは球磨川くんの能力を参考にしていこうとしよう。

時は過ぎ只今の時刻は午後五時

今は四人と別れた後、近くのスーパーで夕食を作るための買い物をして帰宅ばかりである。

今日は歩き回ったので疲れたが休む暇も無く携帯電話がブブブと振動する。

どうせ、飾利ちゃんか涙子ちゃんあたりだろう。

そう思っていたのだが

『哀川潤』

哀川さんだった・・・。

嫌な予感MAXなのだが、渋谷電話に出る。

『あのさ、いーたん。その内そっちに行くかもしんねえし。』

「誰が？」

『勿論あたしが（笑）。じゃ、そゆことで。』

ブツン、プープー

嫌な予感当たったし・・・。

はあ、近いうちに何かが起こることが決定したな。

ぼくは不安を抱えながら眠りについた。

余談なのだが涙子ちゃん達による街案内は結局の所、銀行、病院、コンビニ、公園

の4か所しか教えてもらってない。

スーパーは自分で探し当てました。

家庭訪問

朝起きると目の前によく知っている人がいた。

「何で此处にいるんですか……潤さん。」

そう。人類最強の請負人こと、哀川潤が戯言遣いの部屋でコーヒ―を勝手に飲んでいたのである。

「何でつて……暇潰し？」

「いや、聞かれても分かりませんよ。」

「本当のことを言うと玖渚ちゃんからのお願い？」

「だから、聞かれてもわからないですつてば。……それに前も友が関係してるみたいに言われましたけど、よくよく考えたら友は今、玖渚機関で長期間の治療中でしょう？そんな状態で依頼が出来るとは到底思えません。」

「ありゃあ、ばれちゃったか。正解のご褒美にキスしてやろう。」

「要りませんからいい加減本題に入ってください。」

「じゃあねえなあ。……いーたんさあ、人物紹介やってないだろう？やってないならドラマCD風やろーぜ。」

「

は？人物紹介？

「意味が分からないんですけど。」

いや、実際のところは全く分からない訳じゃない。

簡単に言うというか分からない第三者、言い方を変えるなら読者の皆さんに今迄に出た人物を紹介しろ、ということだろう。ただ、ドラマCD風ということだけが分からないはまだ。

「いやあ、この物語って小説だからな、適当に声優振り分けてドラマCDみたいにやってみたってことさ！」

もう、何処に何をどの様に突っ込んでいいのか分からない・・・。

「ちなみに、アタシの声優は若本規夫さんわかもののおに決まってるけどな。何といってもあの渋い声がたまないよなあ。」

「言わしてもらいますけど潤さんにあの渋い声は絶対に合いません。断言出来ます。そもそも潤さんは女性でしょう？そんな人が何で男性声優さんをチョイスするんですか？」

「いいじゃねえか。細かいことは気にすんな。」

細かいことって、おかしいでしょ？結構な割合で問題になりますよ？

「ちなみに、いーたんの役は釘宮理恵くぎみやりえだ。これは一億円積まれても変える気は無い。」

それも合わねえよ。

もう、この話し合いにおいては流石の戯言遣いも勝てる気がしないよ……。

というか、やる気が無くなってきた……。

だって哀川さん、会話がめっさ一方通行だもん。

閑話休題。

「人物紹介ってどういう風にやればいいんですか？」

「別にこれといって難しい事はしないがこの小説に出た名前の人を簡単に説明するだけだ。勿論、あたしやいーたんを含めての話だな。」

「わかりましたよ。やればいいんでしょう。その代わり潤さんは紹介中、何も喋らないで下さいよ。」

「えー、それじゃあドラマCD風に出来ねえじゃねーか。」

「そんなこと言ってたら紹介すら出来ませんってば。わかってますか？」

「わかってるって（笑）」

絶対にわかってない。

というか、紹介中に何かしでかす気だろう。

実に心配だ。

心配だがぼくが気にするだけ無駄なので放っておくしかない。

（笑）とか、余計に心配だ。

「じゃあ、次のページから人物紹介始めるぜ。あつ、勿論いーたんがこっちに来てから出来たお友達の女の子四人組も今の内に呼んどけよ?。」

何で飾利ちゃん達のことまで知ってるんだよ。

最早、潤さんの中にはプライバシーという言葉は無いみたいだ。

もういいや。打ち切ってしまうおう。

「ほら、いーたん呑気にほおけてないで挨拶すんぞ。」

「え、ちよつ、待って。ていうか、何の挨拶ですかッ!?。」

「何って・・・、第7話も終わった事だしお別れの挨拶をするんだよ。」

次回も見て下さいって感じでな!アーユーオーケ?。」

「わかりましたよ。取り敢えずやりますが、どうなっても知りませんから。」

「大丈夫だって。いーたんは自分の名前を言うだけだからな。」

「なら、大丈夫です。」

「じゃあ、やるぞ。」

では——、何かいい事あったらあたしに寄越せ。」

「お相手は人類最弱の戯言遣いと・・・」

「人類最強の請負人こと哀川潤だったのだ。」

最後こんなんで終わっちゃっていいのか？

はあ、今回の話は戯言ばかりだったなあ。

人物紹介の会

「では、張り切って始めましょう。」

「そうだね、初春。」

何で飾利ちゃんと涙子ちゃんはこんなに乗り気なんだろう・・・。

ぼくは異様に気だるいのに。

しかも、これをする原因である潤さんはまだ来てないしさあ。

そういえば昨日、潤さんに言われた通り飾利ちゃん達に人物紹介するから集まってって連絡したら、皆すんなり来たんだよね。びっくりだよ。

これはもう、お菓子をあげるから着いておいでって言われたら着いて行く子供みたいだったね。

でも、今考えるとお菓子って少し安価だと思わないか？

それにその程度なら、家に帰ってたんすを漁った方が沢山手に入るし、

他人から貰うお菓子ってどんなものが貰えるか分からないし、自分の嫌いなお菓子だったら最悪だ。

知らない人に着いて行って嫌いなお菓子貰って、その上誘拐されたらたまったもんじゃない。

閑話休題。

そろそろ、自己紹介を始めないと日が暮れてしまう。

「いっくん、後はいっくんだだけだよ。早く自己紹介してね。」

「そうだぞ。さっさとしろよ、いーたん。」

「・・・・・・・・・・・・・・・・。」

人が考えてる間に勝手に自己紹介を進めるのはどうかと思う。

いつの間にか、潤さんまでいるし・・・。

しかも、なんか仲もいいよな気がしなくもない。

「一応、聞きますけど皆さん自己紹介は終わってたんですか？」

「勿論ですよ！だから、早くいーたんさんの自己紹介を始めてください。」

勿論と来ましたか。

というか、常盤台の二人は何で黙ってるのさ？

ぼくの目の前に居るんだから何か喋ろうよ。

沈黙から数分たってようやく、美琴ちゃんが話しかけてきた。

「ねえ、あんたあの美人とどんな関係なの？」

美人？

ああ、潤さんのことか。

「何も聞いてないの？」

「ええ、貴方と恋人未満夫婦以上の関係だと仰ってましたが、流石に嘘だとわかりますので、結局何も聞いていないのとかわりありませんわ。」

潤さんらしいといえはそうなんだけど、
何勝手にしようもないことでうち上げてるんですか。

「簡単に言えば仲の良い友達って感じかな。そして、
ばくを此処がくえんとしに連れてきた張本人。」

「ふうん。他には？職業とかは何してるの？」

あれ・・・、軽く大事なことを流された気がする。

目の前で一億円入ったトランクを迷うことなく
川に流されたくらいシヨックだった。戯言だけどね。

「ええと、職業は請負人。特技は変装。業界のほうでは
オバーキルトレッド
人類最強や赤き征裁と呼ばれている。
と、言った所かな。」

「でも、今更ですけどーたんさんと哀川さんって
外部の人ですね？」

また流された・・・。

「おい、初春ちゃんだっけ？あたしのことは名字で呼ぶんじゃねえ。」

「どうしてですか？」

「あたしを名字で呼んでいいのは敵だけだ！次に名字で呼んだらぶん殴るぞ。」

「分かったな？その三人も！」

「はい・・・。」

「わかりました・・・。」

「分かったわ。」

「分かりましたですの。」

久しぶりだなあ。この流れ。しかも女子にぶん殴るってどうよ？

というか、その台詞だとぼくは明日にでも殴られるだろう。憂さ晴らしに。

そんな気がする。気のせいだと信じたい。

「で、結局いーたんとんと潤さんはどうやって学園都市に入って来たんですか？」

「ああ、それはな・・・、アレキスター学園都市の統括理事長をちよつとな・・・。」

ちよつとなつて、絶対、何かしただろこの人。

「具体的には、何をしたんですの？」

「ちよつと軽ーく・・・ぶん殴つてきた。」

何してんだよこの人・・・。

「それって犯罪じゃないですか。」

「大丈夫だ。」

「どうしてですか？」

「アイツはあたしの知り合いだ。」

知り合いでも駄目だろ・・・。

ていうか、いつの間に空気が重くなつてゐる気がする。

原因は分かりきつてゐるけど・・・。

「空気が重くなつてきたがいーたんの自己紹介始めようぜ。」

空気を重くしたのはあんたが原因だろうが。

「では、存在が不詳で不明の戯言遣いの自己紹介を開始します。」

「堅苦しいよー。もっと楽に行こうよ、いっくん。」

「そうだぞ。もつと楽に行かなきゃあたしの拳が飛んで来るぞ。マジंगाーZのロケットパンチの如く。」

「それじゃあ、楽に出来ませんよ・・・。」

それに拳がとぶって、そっちの意味ですか!？」

ていうか、現実的に拳が飛ぶわけないか・・・。

いや、哀川さんなら拳圧ぐらい飛ばしてきそうだ。

取り敢えず楽にしとかなきゃ、殴られそうだ。

「3月生まれの神戸出身で此処に来るまでは京都の鹿鳴館大学に通つて、血液型はA B型のRhマイナス。能力は皆さん知つての通り

オールマイクシヨン
大嘘憑き、つて所かな・・・。」

「へえ、いーたんに能力なんてあつたんだ。」

ん？今、哀川さんは何て言った？

まるで、その言い方だとぼくに能力があることを知らなかったみたいじゃないか。

でも、ぼくに能力があるって言ったのは哀川さんなのに・・・。

「ああ。今の内にいーたんに言っておくがあの時いーたんに言ったのは
ほとんどが、嘘だ。」

おい。

「話は変わりますけどいいーたんさんに友達っています?」

心外だ。

たしかにさっきまで話してた事とはずいぶんかけ離れてるけどかなり失礼な質問されたもんだ。

「さすがに友達くらいいるさ。」

「何て言う方なんですか?」

「やみくも闇口崩子ちゃん、おもかげまじ想影真心、くなぎさとも玖渚友の三人が『生きている中』では友達とかに

一番近い位置にいるかな。まあ、親しい人なら他にもたくさんいるけど。」

「生きている中ではって……、それに『玖渚』ってあの『玖渚』ですか!？」

「くなぎさ? 初春は何か知ってるの?」

おや、飾利ちゃんは玖渚について少しは知っているみたいだ。美琴ちゃんと黒子ちゃんも黙ってはいるが、表情からしてこの二人も知ってる感じかな。ただ涙子ちゃんは何も知らないといった感じだけど……。

「あのですね佐天さん。玖渚は……いえ、『玖渚機関』とは日本における数少ない財閥家系の一つで、その最上モデル。」

関連企業に傘下企業の数に21200以上とされています。そして世界中に影響力を持ち、
「意外」^{いちがい}、「式栞」^{しきあり}、「参栞」^{さんざか}、「肆屍」^{しかばね}、「伍砦」^{ごとりで}、「陸枷」^{ろくかせ}、「？」^{しち}の名を飛ばして
「捌限」^{はちぎり}そしてそれらを束ねる「玖渚」^{くなぎさ}。
西日本に陣取るこれらの組織で、一世界を築いています。本部は兵庫県南東部の神戸、西宮、芦屋の3市にまたがっています。たしか、そうでしたよね白井さん。」

「ええ、それであつてますの。」

「ちょ、ちょっと待って聞いてアレだけど訳わかんないよ。えーと、つまりいつくんは世界有数の財閥家系の子と仲の良い友達ってわけ？」

「そうなるね。」

「でもなんで、あんたが『あの』玖渚の直系と関わりがあるのよ。それに今はどうなってるの？」

「それは・・・今話すとややこしくなるから次回をお待ちください。ってこととしてくれない？」

実際は話す気なんてないけど。

「まあいいわ、その日を待ってるわ。」

「おし。いーさんの自己紹介も終わったことだし、お開きにすつか。」

「そういえば潤さん。後半、全然会話に入ってこなかったですけど何かしてたんですか。」

「いやー、つまんなくなってきたから寝てた。」

自由だなこの人は・・・。

少しくらい自分を抑えて欲しい。無理だけど。

「さて、潤さんも言ってたようにお開きにしようか。」

「そうですね。日も暮れてきたことですしね。わたくし達は帰らしていただきますわ。」

「じゃあね。」

こうして常盤台の二人は帰っていった。

「そろそろ、あたし達も帰ろっか初春。」

「そうですね。では、いーたんさんまた明日。」

「じゃーねー。」

「おう。」

何で哀川さんが返事するんですか。

「あ、そうそう。来週の休みに服買いたいんだけど付いて来てくれない？」

「いいよ。ぼくなんかで良ければ。場所は？」

「セブンスミストってお店なんだけど、その日は行く前にいっくんちに迎えに来るから待っていてくれて、だいじょうぶ。」

「了解した。」

だから、何で哀川さんが返事するんですか！？

「今度こそ、ばいばーい。」

「うん、じゃあね。」

こうして雑談が何割かを占めていた人物紹介が終わっ・・・いや、終わってないや。それどころかぼくの自己紹介と哀川さんの説明くらいしかしてない。

皆はぼくが考えているうちにやったと言っていたが人物紹介なのだから

公表しなければ意味がない。

つまり、今回はぼくの個人情報みづうみが漏洩したくらいで他には別に特筆することがないのである。

まあ、今日は割りとした気がするし、良しとしよう。

「そつえば、潤さんは帰らないんですか。」

正直なところは早く帰って欲しい。

「今日はここに泊まるわ。」

「本気ですか？」

「当たり前じゃねえか。本気も本気。本気と書いてマジと読む。」

だからどうしたって言うんだ。
もう、勝手にしろってんだ。

「おう。じゃあ、自由勝手気ままにさして貰おう。」

「心を読まれた！？それになんか色々と悪化してる！？」

「いいじゃねえか、減るもんじゃねえし。」

減りますよ……。プライバシーとか色々と。

「寝るときはベッドを使ってください。ぼくはもう寝ますからね。」

ぼくはこの言葉を期に意識を暗闇の中へと落としていった。

朝起きるとぼくの身に大変なことが起こっていた。

科学者

「オハヨウゴザイマス……。」

眠たい……。

前回の最後、つまり寝る前に意味も無く伏線を張って置いたりしてみたが、

特に何かが起きるわけでもなく、いつも通りの日々を過ごしている。

そう言えば、あいかわ哀川さんは朝起きると姿は無く、その代わりとして

『しむらぎやね四季崎記紀のつくりし完成形変体刀十二本を集めて

ください、と依頼が来たから行ってくる。二週間ぐらいで戻ると思うから頑張れ。』

と書かれたメモが机の上に置いてあった。

哀川さんはぼくに何を頑張れと言っただろうか。

というか、完成形変体刀何なんだよ。

アレか？妖刀とかか？最近意味不明なことばかりだ。

それにしても……

「熱い……。」

間違えた。実際は『暑い』だった。

話は変わるが、ぼくは今炎天下の中、特に目的も意味もなく彷徨さまよっている。

何故だろう……。

「ん？」

数メートル先に見知った人がいた。

レールガン
超電磁砲こと、みさかみこ御坂美琴ちゃんだ。

「こんにちは。美琴ちゃん。」

「！あんた良いところに来たわね！」

おおう、なんだこの哀川さんに匹敵しかねない気迫は……。

「どうしたのさ、そんなに慌てて……。」

「いやあ、『この人』どうにかしてくれない？」

そう言つて美琴ちゃんは白衣を着た女性を指差す。

……この人何処かで見たとある気がする。

何処だっただけ……。

「どうかしたんですか？」

「いやあ、車を何処に停めたか分からなくなっちゃってしまつてな……。

その子は途方に暮れている私に声掛けてくれたんだ。」

へえ、そうだったんだ。

美琴ちゃんって意外と優しいな……。

まあ、そんなことは置いといて。

「場所はわかったんですか？」

「まだだ。」

「そうですか・・・ならばくも手伝いましょう。人では多いに越したことは

ありませんから。しかし、此処じゃ熱熱中症になりかねないので、
取り敢えず日陰^{あそこ}に行きませんか。
そこで話し合いましょう。」

ぼくは2人に提案してみる。

「そうね。」

「そうしよう。」

「付き合ってもらうお礼だ。」

そう言つて、白衣のジョセイがぼくと美琴ちゃんの前に
飲み物を置く。どうやら、ぼくたちの為に買ってきてくれたようだ。

「ありがとうございます。」

「アリガトウ・・・。」

美琴ちゃん・・・お礼ぐらいはちゃんと云おうよ。
そう思いつつ、買ってもらった飲み物に手を伸ばす。

「熱ッ！・・・って、スープカレー！？」

「暑いときには熱い飲み物がいいのだよ。それにカレーのスパイスには

疲労回復を促すものが含まれている。」

「理屈は分かりますけど・・・」

そう、理屈は分かるけど今日は暑すぎるんだよ。

「気分的には冷たい飲み物のほうがいいなあ・・・なんて。」

美琴ちゃんさつきから少し図々しくないかな？

中学でこの調子だと将来その性格で苦労する羽目になるよ。戯言だけど。

「気分か・・・若者たちはそういう選択をするものだったな・・・買いなおそう。何がいい？」

ほら、美琴ちゃんがあんな事言うから優しい大人が気を使う事になる。

「いいです！お気持ちだけで十分ですからッ！」

「すまないな・・・」

研究ばかりしている所為か理論的に考える癖がついてしまっていて

な．．．。」

「研究．．．学者さんなんですか。何の研究をしてるんですか？」

美琴ちゃんが白衣のジョセイに質問する。

「大脳生理学について研究している。専攻はAIM拡散力場だ。」

「ちなみにお名前は？」

「きやまはるみ木山春生だ。」

ん？木山春生？

どこかで聞いたことがあるような．．．．．！思い出したッ！

この人．．．ぼくにとってER3システムの先輩であり、三好先生みよしの友人でもある人だ。

さらに、この人の両親は共に弐弐にじふで輝かしい成績を誇っていた。という事を、友に聞いたことがある。

しかし、そんな人が弐弐とも関わらず、こんな所にいるんだろう．．．。

こればかりは、聞いてみるしかないか。

「木山さん、一つ質問していいでしょうか？」

「何だい？私に答えられことは一つと言わず、いくつでも答えよう。」

」

「じゃあ、二つ目の質問です。AIM拡散力場とは何ですか？」

「キミはこの街の学生なのに知らないのか。」

「すみません。最近学園都市に来たもので……」

いや、学習不足なだけかもしれないけど。

「そうか、それなら仕方がないな。なら、今から説明しよう。」

「お願いします。」

「簡単に言うならばAIM拡散力場とは能力者の発する微弱な力のことだ。

それも特殊な機械を使わないと測れないほど小さく弱い力だ。

まあ、動物たちは本能的に感じ取れるようだがな。」

へえ、面白いものだな。ER3システムでは一切出てこなさそうだから、何か得した気分。

「面白いですね。」

「では、二つ目の質問です……ER3システムは退屈でしたか？
あの場所それともER3システムが嫌になりました？」

「君は何処まで知ってる？」

「特に知ってる事なんてありませんよ。ただ、

貴女がERシステムに居たことと両親が式琴で働いていたということ以外はね。」

「私の事はともかく、何故、私の両親の事まで知っているんだ、君は……。」

「何故って言われましても、ERシステムは途中下車しましたけどぼくも行っていましたし、

式琴程度のセキュリティなんて底が知れてる。

そして、決定的なのはぼくには『玖渚機関^{くなぎさかん}』に知り合いが居ます。ついでに言つと三好先生とも既知の間柄です。」

「三好の事を知っているのか。それに玖渚……実在したのか。」

「ええ。そうです。だから——」

「あー、もう！さっきから話を聞いていると意味深な事ばかり言つて訳分かんない！アタシにも話に参加させなさい。」

この自分主義な感じは哀川さんを彷彿^{ほうふつ}とさせるなあ。

……じゃなくて、ERシステムを説明しろと？

「嫌だ。」

「なんでよッ!？」

ERシステム自体は別に悪いものじゃないけど

説明すると少し長くなるかもしれないし、

何より、ここ数日間に色々なことがありすぎて、

ぼく^{こゝろ}の精神はもう、どうしようもない位ズタズタさ。

なので此処は当たり障りのない返事をしておきましょう。

「内緒。」

しかし、ぼくは返事の仕方を間違っただけだ。だって、返事した直後、何かビリビリとしたものが飛んできましたもの。

「ちょっと待って美琴ちゃん！」

「何？」

「何をそんなに怒ってるのさ!？」

「怒ってないわよ!」

明らかに怒ってるよ。

「取り敢えず落ち着いて。ね？」

「ね?じゃねーわよ!あんた、まだ隠し事してたのね!」

「だってさ・・・」

「だってじゃないわよ!」

ああもう、会話が通じない。

会話が通じないってことは交渉も出来ない。

交渉が出来なければ嘘も戯言もありやしない。

これこれで立派な戯言封じだよ。まったく・・・。

「で、美琴ちゃんは何が知りたいのさ。」

「あんた達がさっき言ってた『ER3システム』についてよ。」

「今度じゃ駄目？」

「駄目ね。だって後に回したらあんたきつと絶対に話さないでしょ？」

よく分かっていらっしゃる。

「仕方ないな。説明するよ。あ、でも説明下手でも怒らないでね。」

「嫌よ。」

身勝手な。

ま、適当にすればいいか。

「君は説明が苦手か・・・。なら、私がやろう。」

「え・・・木山さんがやってくれるんですか？」

「ああ、君がそれでいいのなら。」

「じゃあ、お願いします。」

「そもそも、ER3システムとは――」

「これで分かったかなお嬢さん。」

「ええ、十分分かったわ。ありがとう。」

「美琴ちゃんの悩みも解決したことだし、そろそろ木山さんの車停めてる駐車場を探しますか……。」

「それもそうね。そっちが本題だね。」

「すまないな。」

こうして、ようやく、ついに車探しを開始した。

二十分間後、ぼく達は飾利ちゃんかざりの協力によって
探し求めていたものを発見できた。

それにしても、飾利ちゃんの情報収集能力は目を見張るものがある
な。

まあ、『チーム』と張り合えそうだ。嘘だけど。

あれ？この『嘘だけど』って何か別の人の台詞のような気がする。

話は変わるけど、ここで少し『チーム』について簡単に説明しておこう。

『チーム』とは、玖渚友のための集団であり、全員が玖渚友を崇拜しているサイバーテロ集団である。

お、そろそろ木山さんは帰るみたいだ。

「今日は、本当にすまないな。」

「別に問題ないですよ。暇でしたしね。」

「あたしも別に大した事してないわ。」

うん。君は本当に何もしてないね。

あえて言うなら、ずっと歩いてたぐらいだよ。

「そうか、ならよかった。では、縁が《合ったら》、また会おう。戯言遣い君。」

こうして、ぼくたちの『車探し』は終わった。

今回は、嘘も戯言も抜きに何かが起こる気がしてならない。

不幸（前書き）

戦闘シーンは苦手です。

不幸

木山さんが最後に言った『縁が《合つたら》、また会おう。』

というあの台詞、あれはどう考えても『狐さん』の台詞だ。

狐さんを知っている人しか知らないなのに、どうして木山さんが知っているんだろう……。。

もしかして……

「ねえ、あんたこれから何か用事ある？」

美琴^{みこと}ちゃんは毎回ぼくの思考時間を邪魔するよね。

何かぼくに恨みでもあるのかな？

「別にこれといってないけど。」

心を読まないでください。

「ならいいわ。ちょっと付き合いなさい。」

「ええと、何処まで？」

「近くの川原までよ。」

「何する気さ？」

「内緒。」

そう言つて美琴ちゃんは黒い笑みを浮かべる。

嫌な予感がシマス・・・。

「此処なら丁度いいかしら。」

「目的の場所まで来たんだし、
そろそろ何するつもりか教えてくれてもいいんじゃないか？」

「それもそうね。それはね・・・

あたしと勝負しなさい!!」

は？いきなり何を言い出すさ、この子は・・・。

「嫌だよ。」

「何だよ!？」

何でじゃないよ。

「じゃあ聞くけど何で美琴ちゃんとはよくと勝負したいのさ?」

「それは・・・」

「それは？」

「あんたがあたしより強いからよ。」

え？何？この子は自分より強い相手と戦いたいということか。
戦闘狂かよ、この野郎。

「確かに美琴ちゃんより序列は上だけど、
別に美琴ちゃんより強いとは限らないよ。」

これで納得してくれれば・・・

「やってみないと分かんないわよ。」

やらなくても分かるよ。

まあ、ぼくも自分の能力をまともに使ったことないし、ちから

丁度良い戦闘経験なるだろうから、やってみて損はないだろう。多
分。

それに美琴ちゃんは自分より強い（序列が上の）相手と戦えるし――
石二鳥だ。

だからぼくは

「わかった。良いよ、やろつ。」

こつ、答えるんだ。

「準備は良い？美琴ちゃん。」

「当たり前よ！」

当たり前って・・・常に臨戦態勢ってことですか？
この戦闘狂め。

「こっちからいくわよ！」

この言葉を合図に美琴ちゃんから
ビリビリっと如何にも高電圧な電撃が飛んできた。

「うおっ！？」

ぼくは当然ながら避ける。
アブねえなこの野郎。地面抉れちゃってるぞ。
手合わせ程度のつもりだったけど、油断してたら死にそうだな。
笑えねえ。

「ねえ、美琴ちゃん少し手加減できない？」

「嫌よ。」

手加減できるか聞いたのに、嫌ときましたか。
そんなに本気で戦いたいのか、この哀川さん二号め。

仕方ないし、ぼくも本気・・・というかヤル気を出すことにするよ。
不本意だけど。

「じゃあ、いくよ。」

ぼくは、一気に美琴ちゃんとの間を詰める。

「殺られなさい!」

そう言つて美琴ちゃんは再び電気を飛ばしてくるけど
ぼくの肩と脇を擦るだけで大して痛くない。

そして、ぼくは美琴ちゃんとの距離を詰めきつた。が、

「甘いッ!」

美琴ちゃんは地面の砂鉄を操って剣の形にしてぼくに振り回して
くる。

今ので縮めた距離が開いてしまった。

危ねえな、コンチクショウ。

というか、

「得物使うのは反則じゃない!？」

「能力で作ったから問題ないわよ。

ついでに言つと振動してチェーンソーみたいになってるから
当たるとちよつと血が出たりするかもね。」

「どう考えてもそれじゃ済まないと思うんだけど!？って、痛い!」

ツツコミしてたら二、三ヶ所切られた。

油断したりしてたら、殺してバラされそれうだ。

そんなことは置いといて再びぼくは美琴ちゃんとの間を詰める。
身体の至るところが痛むが気にしない。

数分後、ぼくはようやく、美琴ちゃんとの間を詰め切った。

右手をピストルの形にして美琴ちゃんに向ける。

「チエックメイト。」

「やるわね・・・でも、これはどうかしら。」

そう言つて、美琴ちゃんを中心に大量の電流が奔る。

嫌な予感がする。ヤバイ。

すぐ此処を離れないと・・・

次の瞬間、雷とも言えるほどの電気が、衝撃がぼくを襲った。

「
■ ■ ■ ■ ■ ■ ■ ■
———」

「あー、やりすぎちゃったかしら。まあ大丈夫よね。」

やりすぎちゃったかしら、じゃねえよ。

声にならないくらいキツかったぞ。

こんなのもう一度くらったら死ぬぞ。

ああ、このままじゃヤバイな。

まあ、このままならね。

しかし、ぼくには『アレ』が有る。

だから、

「大丈夫だよ。」

と、余裕で返事が出来る。

「なんであれをくらって立ってられるの！」

「なんでって、ぼく的能力で雷のダメージを『なかったことにした』だけさ。」

「なかったことについて・・・あんたそんなこと出来るの!？」

「できなきゃこうやって立ってないよ。」

一応説明しておくけど、ぼく的能力は『事象』や『因果』に干渉する力。

つまり、否定の力。因果崩壊の力。良い事も悪いこともごちゃ混ぜにってしまう力。

まあ、あんまりいい能力じゃないことは確かだね。

たぶんだけど、能力測定時^{あのとき}、プールの水が無くなったのはプールの水が溜まっているという事実^{こと}をぼくは否定^{なかったことに}したんだと思う。だから、プールの水が無くなった。と、ぼくは推測するね。

そんなことは置いといて、この機会を無駄には出来ないので
一気に攻める。

そして、

「捕まえーた。」

ぼくは美琴ちゃんの手を逃げられないように握った。

「なっ！？やられた。」

「どう、降参する？」

「ハッ、降参ですって？舐めてんじゃないわよ！！
（このまま、直接体内に電流を流し込んでやるわ。）」

「……………」

「（何で……なんで、電流が流れていかないどころか
能力が発動しないのよ！？）」

美琴ちゃんを観察してたら、段々美琴ちゃんの顔に焦りが出てきた。
おー、困ってる困ってる（笑）

詰まる所、美琴ちゃんはぼくに電気でも流そうとでもしてるんだろ
うけど、

そんなのできるわけがない。

「何かしようとしてるみたいだけど無駄だよ。」

「何だよッ!!」

「だって、ぼく的能力で美琴ちゃん的能力を『なかったこと』にしてるからね。ただし、相手に直接触れている間に限られるけどね。」

「あんだ、そんな事まで出来るの!? せこいじゃない!」

確かに、せこいと言えばそうなんだけど・・・。

「能力の範疇はんちゆうだから問題ないと思うけど。」

「一応聞くけどこの勝負ぼくの勝ちでいい?」

「なんでよ!」

美琴ちゃんは不満そうに聞いてくる。

「だって今美琴ちゃんはぼくの大嘘憑のうじゆくきで電撃ちからを使えないから、ただの女の子だし、それに・・・」

「それに?」

「ぼくは片手が空いていて、美琴ちゃんを殴り放題って状況。簡単に言うとぼくは今、圧倒的有利な立場にいて、美琴ちゃんは圧倒的不利な立場にいるって事さ。」

「・・・・・・・・。。。」

「・・・・・・・・。。。」

しばしの沈黙が続く。

「わかったわ。不本意だけどあたしの負けで良いわよ。」

「ありがとう。」

「それにしても第二位とは言え学園都市に
来たばかりの奴に負けるとは、なんかムカつくわね。
『ここ』まで来るのに結構苦労したのよ？」

「……………」

「まあ、すぐに追い付いてみせるけどね。」

「はははっ。」

嗚呼、美琴ちゃんはすごいなあ。

だって、前に美琴ちゃんから聞いた話だけど、
美琴ちゃんは最初能力値はレベル1だった。

そこから、血の滲む様な努力して今のチカラがあるらしい。
だから、何の努力も無しにいきなりレベル5になったばくに
負けることは本当に悔しいに違いない。

それから、お互いに自分の事を色々語り合ったりした。

しばらくして何も話すことがなくなったので二人共夜空を眺めていた。

空に見えるのはたくさんの星と飛行船、

そして、『赤い物体』。

ん？何か段々近づいてないか？

いや、もしかしたらぼくの見間違いかもしれない。

美琴ちゃんに聞いて確認してみないと・・・。

「ねえ、美琴ちゃん。あの赤い物体こっちに近づいてきてない？」

「ええ。あたし達の見間違いじゃないならね。」

ぼくの見間違いじゃないみたいだ。

じゃあ、あれは何だ？

ああだ、こうだ考えてる内に赤い物体は

川に落ちた。

ええ。もう、そりゃあ、すごい勢いで。

水柱が三メートルくらい立つくらいはすごかった。

「何が落ちてきたか見に行きましょう。」

何か面白いものかもしれないわよ！」

面白いものって・・・その発想はぼくには無かったね。

今更ながら美琴ちゃんには少々子供っぽいところがあると思ったね。

落ちてきた物体に近づいてみると、その物体には驚かせられた。

「嘘でしょ……。」

美琴ちゃんが驚くのは無理もない。

なぜなら……

「よお。数日ぶりだな、『いーたん』。」

空から降ってきたのは人類最強の請負人『あいかわじゅん哀川潤』だったのだから。

不幸と遭遇

「ねえ、この人ほんとに人間なの？」

と、美琴ちゃんが聞いてくる。

人間が空から落ちて来たんだもん。驚くのは無理ないか……。
しかし、驚くところは其処じゃないと断言出来る。

何故なら……

「そうだよ。何の超能力もないけどね。」

そう、この人にあるのは少々異質な特技だけ。

もし、哀川潤に超能力があったとしたら、

『我、最強』とでも名づけよう。戯言だけど。

「おい、いーたん。」

「なんですか？」

「勝手に能力考えてんじゃないよ。」

あたしの能力を考えて良いのはあたしだけだ！」

哀川さんは急にそんな事を言ったかと思うといきなり殴って来た。

「へぶッ。」

「わかったか？いーたん。」

「はい・・・、すみませんでした。」

「うむ。それでいい。」

良くねえよ。

勝手とは言ったって、名付けただけですよ？

嗚呼、不幸だ・・・。

「超能力者じゃない人間が空から落ちて無事なわけがないでしょ！」

それはそうんだけど・・・

「おいおい何の話してるか知んねーけど、いーたんタオル貸せ。
水でびしょびしょなんだよ。冷たくてしゃーねえ。」

濡れたのはあんたの責任だろうが。

「タオルなんて持ってませんよ。」

「持ってねーのかよ。」

「つたく、しかたねえ自分のタオル使うか。」

自分で持つてるなら真っ先にそれを使えよ。

「よし！濡れた箇所は全部拭いたし本題に入るぞ。」

本題ねえ。

考えちゃいたがやっぱり何かあるのか・・・。

「あのー、あたしは場違いみたいだし帰っていいかしら。」

あー、確かに美琴ちゃんは場違いだね。

でも、哀川さんは人を巻き込むの好きだしなあ。

どうだろうなあ。

というか、珍しく美琴ちゃんが首を突っ込まなかったな。
何か感じたのだろうか。

「おう、美琴っちは帰っていいぞ。

いーたんがいたらそれで問題ないからな。」

その台詞からしてぼくは巻き込まれること確定なんですね。
てか、美琴っちって・・・。

「じゃあね、二人とも気をつけるよー。潤さんも仕事頑張ってねー。」

「おう。」

軽いッ！

なぜ哀川さんにまでいつも通りの言葉使うのさ!?

気にしてないみたいだから良いけどさ。

年上には敬語使おうよ。

まあ、そんなことはいつものことなので
美琴ちゃんに

「じゃあね、美琴っち（笑）」

からかって、そんなことを言うと、

「美琴っち言うな——！！」

と、顔を赤面させて叫びながらこっちに

電撃を飛ばしてきてその後、猛スピードで帰っていった。

ええ、もうそりゃあボルト選手も真っ青なくらい。

美琴っちと呼ばれるのがそんなに恥ずかしかったのだろうか。

閑話休題

「今回は何を手伝えれば良いんですか？」

「おっ、いーたん珍しくあたしの考えを先読みすんのな。」

先読みなんてしたくて出来るようになったわけじゃない。

「潤さんが毎回ぼくに仕事を手伝わせるからパターンを覚えちゃっただけですよ。」

「ふうん。ま、どうでもいいが。」

今日、いーたんに手伝って欲しい仕事は『これ』だ！」

そう言つて哀川さんはぼくに一枚の紙を突き出す。
というか、どうでもいいと言われた。

今更なんだけど、哀川さんとの会話は相も変わらず一方通行だ。

「ええと、白紙ですよ?」

「だって依頼来てねえもん。」

「どういふことですか?」

「どういふこともクソもねえよ。」

さっきも言つた通り依頼も仕事もねえんだよ。」

「じゃあ、なんで嘘ついたんですか?」

それに空から落ちて来たり、

美琴ちゃんを帰したりしたりしましたけど意味ないですよ?
教えてください。」

「言つなれば、ノリだ。」

はい?

え、ぼくは哀川さんのノリに付き合わされたつてことか?

ノリと勢いばかりだな、この人・・・。

仕事五パーセント、悪意三十パーセント、

勢い二十パーセント、ノリ三十パーセント、

その他適当なもの十五パーセントで哀川潤の行動は構成されている。
そう言われてもおかしくないだろう。

悪意とノリの割合が高すぎる気がするが

まあ、これで妥当なところだろう。

「で、完成形変体刀は集めきったんですか？

二週間で戻るって言ってましたけど、まだ二週間経ってませんよ。」

完成形変体刀については特に知る必要もないので訊きはしない。

「いや、な？完成形変体刀は昨日の内に集めきったんだがな、道に迷って樹海に入っちゃったんだよ。」

「よく無事生還できましたね……。」

「まあ、あたしだからな。……ん？」

「どうしたんですか。」

「いーたん、あそこよお——く見てみ。」

そう言っつて、哀川さんはある一角を指差す。

「何があるって言うんですか……っ！？」

そこには

銃を持った黒いスーツを着た男が数人と
何も物を持っていない女の子4人が対峙していた。

しかし、異常なのは女の子達は無傷で男の方達は
身体に至るところに傷を負っていて中には瀕死の人までいる。

「あれは一体、なんですかっ!？」

「詳しいことは分かんねえが、おそらく学園都市の暗部だろう。」

「止めて下さいよ!」

「嫌だよ。めんどくせえ。」

鬼! 鬼畜!! 悪魔!!!

「チッ。しゃあねえなあ。わかったよ。」

「今心読みませんでした?」

「気のせいって事にして置け。」

やっぱり読心術使えるですね・・・。

「じゃあ、ちよっくら行ってくるわ。」

いーたんはそこで解説や何やらしといてくれや。」

哀川さんはそう言って歩き出す。

「気を付けて下さい。」

激励の言葉をかけたつもりだが
哀川潤は立ち止まって言う。

「おいおい、あたしが誰だか分かってるんだろっな？
人類最強の請負人こと哀川潤だぞ？
かける言葉間違ってるぞ。」

「それもそうですね。すみませんでした。
では改めて・・・

頑張ってください。」

「おう、頑張ってきます。」

そう言って哀川潤は再び歩き出す。

数分後にぼくは、哀川潤の請負人としての
実力を再確認することになる。

赤き征裁 vs アイテム（前書き）

いーちゃん目線ではありません。

赤き征裁 vs アイテム

「ねえ、むぎの麦野。」

一人の少女が仲間の三人の内一人の少女に声をかける。

「ん、何？きぬはた絹旗。」

近くに目撃者でもいたりするの？」

麦野と呼ばれる少女は絹旗の呼びかけに

冗談交じりで答える。

「超正解です。しかもこっちに歩いて来てます。」

「ゲッ、マジ？」

「それって結局ヤバくない？」

「……どうする麦野？」

この先説明する暇がない可能性があるのも今の内に説明するがこのチームを『アイテム』と言い、むぎのしずり麦野沈利、きぬはたさいあい絹旗最愛、たきつぼ滝壺理后、リーダーフレンダの4人が中核を担っている。リーダーは麦野である。

「どうする言われたって『消す』しかないわよ。」

流石は暗部と言ったところだろうか。
人を殺す事に躊躇いがない。

しかし、その躊躇のなさも暗部であるという事実も能力者であることも

これから起こることを考えれば全く以って意味を持たないだろう。

何故なら4人の少女に向かつて来てる相手は

最強の超能力者でもなければ核兵器を持った軍人でも

幻想を打ち砕く少年でもなない。

人類最強の請負人『哀川潤』なのだから。

「おいおいおい。」

あたしの目の前で人殺そうとしてんじゃねえよ。」

「あんた何者？」

「あん？あたしか？」

「それ以外に誰がいるのかしら？」

「一応言つとくが、あそこの影に隠れちゃいるがもう一人いるぞ。」

戯言遣いにとっては傍迷惑なカミングアウトだった。

「あーもー、鬱陶しいわね。あんたの名前を教えなさい。」

「あたしの名前は哀川潤だ。しっかり覚えて置け。」

ちなみに言っておくがあたしはお宅らの名前知ってるから言わなくていいぞ。」

「哀川潤って・・・もしかして赤き征裁の？」
オーバーキルドレッド

「ほう。あたしの名前を知ってもらってるのは光栄だが、今はそんなこと置いといて戦おうぜ。」

覚えておけと言ったのはあんただろ・・・。

哀川潤の自由勝手すぎる発言にカチンと来たのだろうか、絹旗は声に怒気を含めて話す。

「あなた何様のつもりですか？
ウザいんで、超黙ってて貰えませんか。」

「ハッ、厭だね。」

「仕方ありませんね。
麦野、超やちゃってください。」

「はあ、ム力つくのはいいいけど人に頼むのはどうかと思うね。」

「ごちゃごちゃ言ってるねえで、さっさと掛かって来いよ。」

「それもそうね。じゃあ・・・」

死になさい。」

麦野は哀川潤に向かってレーザーのようなものを撃つ。
その攻撃は物体を原子から崩し、

破壊してしまいそうな威圧感を秘めている。

それは哀川潤に向かって直進する。

しかし、彼女は避けようとする素振りもなくただ突っ立っているだけである。

そして麦野の攻撃は標的^{あいかわけ}に直撃した。

衝撃で砂煙が舞う。

「あーあ、何か呆氣ないわね。

私たち喧嘩売ってきたから少し期待してたけど期待外れだったわね。」

たしかに普通、あのレヴェルの攻撃をともに受けて無事であるはずがない。

しかしそれは『普通』の人間に当てはまって『哀川潤』には当てはまるとは限らない。

彼女は超能力こそ持つてはいないが普通ではないのだ。
^{ノーマル} ^{アブノーマル}
普通ではなく異常。

『普通』の人間ではなく『哀川潤』という一つの人種。

少し関係ないことを言うと、彼女は常識を知りはしていても守る気などサラサラない。

彼女は己の決めた常識^{ルール}の中で生きているのだから。

「勝手に人殺したことにしてんじょねえよ。

あーあ、お気にのスーツが焦げちゃったじゃねえか。」

砂煙の中から現れたのはスーツの一部が焦げた^{こげ}ただけの哀川潤が現れた。

「う、嘘でしょ……」

麦野が驚くのも無理はない。

彼女の能力、原子崩しとは攻撃は電子を波と粒子のどちらでもない状態に固定し、

自在に操る能力（正式な分類上では「粒機波形高速砲」と称される）。

結果として、固定された電子は、ほとんど質量を持たないにもかかわらず「壁」として機能し、

その「壁」を動かすことで圧倒的な破壊を引き起こすことが可能で、それを喰らってスーツが焦げただけというのが可笑しい。

「それにしても今の攻撃はなかなか良かったぞ。

お礼として、鳩尾にパンチしてやろう。」

それはお礼と言うより単なる暴力である。

「ふざけんじゃないわッ！」

哀川潤の攻撃宣言にビクついたのか麦野は原子崩しを連発する。

「こんなトロい攻撃当たるかよ。」

周りからしたら視ることは出来ても、

身体が反応できない速度の攻撃をいとも簡単に避けていく哀川潤。速過ぎて最早残像が見える。五体くらい。

「（ちつ、当たらないわね。）」

「ほらほら、こんなもんか？
氣い抜いてつとあつという間に死ぬぞ。」

「ちっ、絹旗ッ。フレンド！
邪魔にならないように援護しろッ！！」

「超了解です。」
「結局やるしかないのね……。」

麦野の要請に快く協力する絹旗と
渋々、嫌々といった返事で協力するフレンド。
しかしそれでも楽しみにしていたのか口は笑っている。

「三対一か……いいねえ。
あたしも本気でやらしてもらおうとするか。」

本気じゃなかったのか……

三対一の戦闘が始まって一分

フレンドはすでにダウンしていた。

さらに正確に言えば開始十秒で
哀川潤のパンチを運悪く鳩尾にもらい氣を失っていた。
実に惚れ惚れするくらいの噛ませ犬っぷりである。

そして哀川潤は絹旗の窒素装甲（そくそくこうば）を破ろうと奮起していた。
麦野は原子崩しの連発による疲労回復の為少し離れたところで休んでいる。

「オラオラオラオラオラオラオラオラオラオラオラオラ
オラオラオラオラオラオラオラオラオラア！！」

絹旗の窒素装甲（たて）はビキビキと悲鳴を上げている。
破壊される事実が目前まで迫ってきている。

「（素手で私の窒素装甲が破られそうですね。超ヤバいです。）」

しかし、突然哀川潤は殴るという行為を止めた。

「そうだ。いいこと思いついた。」

今から本気で『一発』殴るから、
それに耐えたら今、この場を引いてやろう。」

あくまでも上から目線で自分のしたいことを話す哀川潤。

「いいでしょう。」

もし、出来なかった場合は『引く』のではなく『死んで』いただきます。」

「いいぜ。」

出来なかったら死ねという提案をあっさり呑む哀川潤。

哀川潤は拳を構える。

「んじゃ、アーンパンチ」

掛け声とは正反対に凄まじい轟音が響く。

それもそのはず、この時、哀川潤の拳は超音速に達している。

普通、人間が生身で超音速に達するとその衝撃に耐え切れるはずもなく、

身体がズタズタになってしまふ。

しかし、其処は哀川潤お決まりの

『我最強。最強故に理由なし。』の決まり文句で済まして置くとしよう。

無理な気もするが……。

超音速の拳に絹旗の能力はなす術も無く、
あつさりといとも簡単に砕けてしまった。

絹旗本人は窒素装甲によつて減速したとはいえ、
かなりの勢いのパンチをもろに喰らい気絶している。

「あとはテメエだけだ。」

「その様ね……。」

実際はまだ滝壺も残っているのだが、
彼女の能力は戦闘向きではないため、
そのことを踏まえると残っているのは
実質的に麦野沈利ひとりだけなのである。

「光の速さで終わらしてやるからかかって来な。」

「上等じゃない！」

麦野は全力を出す覚悟をした。

彼女は本気で戦っていたが全力ではなかった。

今の原子崩しはレベル5とはいえ、未完成である。

それ故に全力で能力を使いつづけるとと身体に

異常なまでの負荷がかかり、『肉体』が崩れてしまう。

それでも全力で能力を使うということは

哀川潤をそうでもしないと倒せない敵と思ったからだ。

覚悟は決まった。

さあ、あとはこれを放つだけだ。

「これで終わりよ。今度こそ死になさい。」

そしてたった今、全身全霊全出力の原子崩しは哀川潤に向かって放たれた。

帰宅（前書き）

今回は短いです。

帰宅

「いやー、さっきのはマジで危なかった。」

「そう言いながらも終始笑顔ですね・・・。」

あいかわ
哀川さんと闘っていた4人は今気絶している。

一人闘っていない娘がいたけど哀川さんと

リーダーらしき女の子との戦闘の余波で気絶していた。

「そりやそうだろう。久々に本気で戦えたんだからな。」

そりやそうなのか？

ああ、そういえばこの人美琴ちゃんと同じで戦闘狂だっただけか。
本気で闘えたとなればそりやあ、テンションも上がりますね。

「それは置いとくとしてですね、
この人たちどうするつもりですか？」

この人たちとは、さっきまで哀川さんと闘っていた4人のことだ。
面倒な役がばくに回ってこなければいいが・・・。

「んー、持って帰る。」

はい？持って帰る？

・・・何かおかしいことを聞いてしまった気がする。

持って帰る？誰が？何のために？

「えと・・・今なんて言いました？」

聞き間違いかもしれないので再確認。

「だーかーらー、持って帰るっていったんだよ。」

「拉致は犯罪ですよ？」

「わかってんよ。そんなくらいは。それに拉致じゃねえ。」

「拉致じゃなきゃなんだって言うんですか・・・」

「テイクアウトだ。もしくは自宅監禁。」

「それは日本では拉致と言っんですよ。」

「大丈夫だ。拉致つても殺すことはねえから。」

そういう問題じゃないですよ・・・。

というか拉致って認めやがった。

請負人兼犯罪者ってどんな職業だよ・・・。

「聞きますけどちなみに誰が持ってて帰るんです？」

「いーたん。」

「ぼくに犯罪者になれと？」

「そんなのは断固として嫌なので断る。」

「嫌です。」

「正確に言うといーたんが連れてかえるのは二人だけだから。な？」

「な？じゃねーよ、この自由人が。」

「残りの二人はどうするつもりですか？」

「んー、その辺に置いとく。」

「あんたは鬼か！」

「その辺に置いとくって物じゃないんですからちゃんと行ってください。」

「と、いうのは冗談で四人ともあたしがもらって帰るわ。」

「もらって帰るわって・・・」

「哀川さんは四人の女の子を物、もしくはペット扱いするのを止める気はないらしい。」

「潤さんがその四人を連れて帰るのはいいとして、その後はどうするつもりですか？」

「もちろん、あたし好みに洗脳もしくは調教するつもりだが？」

「洗脳か調教って・・・どっちも駄目だろ。」

「あんたの脳内辞書に人権という言葉はないのか？」

「『人権』？それくらいあるに決まってるだろう。馬鹿じゃねえの？
しかし、そんなのはあたしには関係ねえ。」

辞書にないことをする。それこそ人生の醍醐味ってものだろう？」

辞書にないことをする……

たしかに面白い言葉だし、何より哀川さんらしい言葉だ。

ですがね――人権は無視しちゃ駄目でしょう。人権は……
……ねえ？

閑話休題

「さて、あたしは帰るとするわ。荷物がたくさんあるわけだしな。」

哀川さんは肩女の子4人を『縦』に積んだ状態でそんな事を言う。
女の子タワー（残念なネーミングセンス）ができあがっている。

「荷物じゃなくて女の子でしょう？」

「そうとも言つ。」

「そうとしか言いません。」

まったく、哀川さんは……

「せいじゃ、see you!」

そう言つて人類最強の請負人哀川潤はこの場を立ち去って行った。

というか哀川さん英語の発音いいですね……。

さて、そろそろ出番の少ない戯言遣いは明日に備えて巢へと帰るとしよう。

しかし、ここで普通に帰るのは

何故か駄目な気がするしどうしようかな。

……そういえばこの前哀川さんとやった『アノ』やり方であらうかな。

少し恥ずかしいけど。

やると決めたからには気を引き締めて……

覚悟も決めて……

「では——、何かいいことあったらいいかもしれませんね。」

お相手は人類最弱こと戯言遣いの×××××でした。」

再会（再開）

「それにしてもよお、相変わらずてめえは死んだような目してやがんのな、
欠陥製品。まあ、前に会った時と違って『生きてる』って感じはするがな。」

どうして――

「それにしても欠陥製品さん本当に人識ひとしきくんに似てますねえ。
何というか雰囲気が。」

どうしてこうなった――

以下回想

ぼくは冷蔵庫の中身が空だということに気が付いたので、買い物に出ていた。

必要なものも買ったし帰ろうとしたところで二つの影を見つけた。

ひとつは知っている零崎人識ぜいひなきひとしきだ。

しかしもう一つの影（女の子）の正体が分からなかったの、
なんとなく声をかけた。

しかし、それが間違いだった。

声をかけたのが原因で二人に捕縛され、
その上家に連れていけとナイフと凶悪な鉄っばい物で脅され、

少々嫌々どうしようもなくぼくの家に関連して行くことになった。

それがぼくと零崎との再会だった。

回想終了

そして今に至る。

人間失格と一緒にいた女の子の名前は零崎舞織。ぜろさきまいおり

最新にして最終の零崎。最終と言うのはこの2人を除いた全ての零崎が滅ぼされたかららしい。

ぼくはその犯人心当たりがあるのだが、ここでは言えない。

「で、何の用だ？」

「はて、何の事やら分かんねえな。」

「そうですよお。私達は別に強盗しにきた訳ではないですよお。それに私達の本業のヒトゴロシだって哀川のお姉さんに禁止されますう。」

零崎のほうは哀川さんと知り合いなのは

知っていたがこの娘も知っているのか……

嗚呼、考えてみれば哀川さんはぼく達が暮らしている『世界』以外には

知らない人などいない。それどころか関わるのも

止めたほうがいいと言われるくらい危険人物扱いされてたっけ。

「ちなみにその『人を殺したらいけない』という

約束を破ったらどうなるの？」

「オレたちが殺される側になる。」

まあ、約束つつより契約って感じだな。

つか、次発見されたら多分殺される気がするんだよ。」

ふむ、コイツが生粋の殺人鬼なのに

漂漂姉妹を殺さなかったのはそういう事か。

殺人鬼が人を殺さないのは自分の命が惜しいからか……。

人の命を奪っておいて自分の命が危なくなったら逃げる。

殺された側からしたら甚だ迷惑な話だろう。
もしくは殺人鬼にも守るものがあるのかもしれないとも考えられるな。

まあ、考える無駄か……。

「もう一度訊くけどぼくに何の用？」

「だーかーらー、特に用はないつつーの。」

強いて言うなら金を貸すか、^{かくま}匿ってくれ。」

用事有るじゃないか……。

毎回思うのだが零崎との会話は疲れる……。

「匿ってくれって言うけどさ、誰かから逃げてるのか？」

実際逃げてはいるんだよな哀川さんから。

前、哀川さんに出会ったときそんなことを聞いた。

二人の零崎を探してるって。

ちなみに理由を聞いたところこの二人はすでに死んだことになっており、

今は捕まったら刑務所、またはあの世直行の鬼ごっこ中らしい。なんとまあ、馬鹿げた事をやるもんだと厭きれてしまう。

「いや、すまん。匿ってくれというのは語弊があるな。何日かだけ泊まらせてくれ。」

「何故ばくがそんなことをしなきゃいけないんだよ……。」

「私達もうお金も寝るところもないんですよ。」

それでぶらぶらしてたら人識くんの

お友達の戯言遣いさんに出会ったって訳ですう。

お願いですう、お金は後でちゃんと返しますから。」

迷惑はかけませんからあ——

と、舞織ちゃんは付け加える。

うーん、どうしようかな。

しかし、舞織ちゃんはお金を脅した時点ですでに迷惑が掛かっていることを分かってない……。

でも、男の零崎はともかく女の子である舞織ちゃんに野宿をさせるのは人としてどうかと思うし……。

……うん。野宿だけは避けなければいけない。そんな気がする。

零崎（男）がセットで付いてくるだろうがしかたない、泊めてやるか。

「わかったよ。泊めてあげる。お金は貸せないけどね。」

「いいんですかあ？」

「うん、いいよ。」

「マジでか？」

「ああ。あ、でも哀川さんが来る可能性がある
あるからそんなに長くは泊めてはあげられないけどね。」

「よっしゃあーッ！とりあえず、寝床確保！！」

「よかったですねえ、人識くん。」

「そうだな、伊織^{いおり}ちゃん。」

ん？いおりちゃん？

「伊織って舞織ちゃんの事だね。どう言う事？」

「あー、それはだな——」

「人識くんは説明下手なんですから黙ってて下さい。」

零崎が説明しようと瞬間、舞織ちゃんが零崎の台詞を遮ってきた。
ちなみに台詞を遮られた零崎は部屋の隅でどよんしたオーラを出
しながら体育座りしている。

普段へらへらしている零崎にしては珍しい光景だ。

後で写真を撮って置くとしよう。

などと、ぼくがしょうもない事を考え始めたところで舞織ちゃんが
説明を始めた。

「一言で言うなら舞織というのは零崎名で、伊織は零崎になる前の名前の事ですう。」

簡単に説明するとそもそも『零崎』とは、血族で受け継いでいくものではなく、なるものですう。

人識くんは例外ですがね。

そして、殺人鬼てんひんきが集まったモノが私達の家賊かぞく——零崎一賊です。」

「ふむ、そういう事か。どのような家族にも共通しているのは名字、そして社会不適合者さむしあなきの集まりが零崎で、その零崎とは仲間意識の表れと言う事か。」

「多分そんな感じです。」

「へえ、零崎一賊って意外と奥が深いのかな。」

今の台詞はばくや零崎の二人のものではない。
そして今はばくの真後ろにいることが分かる。

Q・何故ですか？

A・息が首に当てられてるからです。

「うなー、最悪ですう。どうします、人識くん。」

「どうするも何も逃げるか殺すしかねえだろ。」

二人の殺人鬼が混乱、というか慌てるのも分からないこともない。
後ろにいるのは今現在進行形で二人が逃げている相手、哀川潤だ。

「よお、久振りモテカワメイクに零崎くん。」

「モテカワメイク言わないでください!」

「おいおい、反論してる場合じゃねえぞ、愛されメイク。」

あ、呼び方変わった……。

「それもそうですね。逃げますよ。人識くん。」

「ああ、しかし、その前に人類最強に一矢報いてからだかな!」

「それもそうですね。」

「お、このあたしと闘おうってか。いつでもいいぜ、かかってきな。」

哀川さんが戦闘態勢に入った。

さて、零崎二人は哀川さんに何処まで『善戦』するか見物だな。

そして、零崎と舞織ちゃんも臨戦態勢に入る。

「それでは、零崎を開始します。」

「殺して解^{バラ}して並べて揃えて晒してやんよ。」

今この瞬間を以って零崎は再開され、

そして哀川潤対零崎舞織&零崎人識の戦いの火蓋が切って落とされた。

虚空爆破

室内で戦闘^{バカ}を始めた三人は置いて、
この前涙子ちゃんと約束したセブンスミストに行くとするか……
・。

最初は涙子ちゃんがぼくの家を迎えに来る予定だったのだが
涙子ちゃんの都合上、現地集合に変更というメールが昨日来た。

ああそれと、言い忘れていたが今はまだ昼前なのだ。

ぼくの部屋で闘っているアホ三人組（哀川潤、零崎人識、零崎舞織
の三人）の所為で

丸一日経っているような感覚に陥ってしまったのだが
零崎二人と出会ったのは朝9時半前くらいだ。

只今、セブンスミスト店内。

涙子ちゃんと一緒に来ていた飾利ちゃんと水着を見ているので
ぼくは美琴ちゃんと店内をぶらぶらしている。

「美琴ちゃんって好きな服やぬいぐるみとかないの？」

「急に何言い出すのよあんたは。」

「いやあ、この前に学園都市の案内してくれたでしょ？
そのときのお礼をしたいなあと思ってね。」

「別にいいわよそんなの。」

それよりお礼をするなら初春さんや
佐天さんや黒子にしてあげなさいよ。」

「いや、その三人にはすでにお礼はしたんだけど、
美琴ちゃん要らないの?」

「あたしだけにお礼をしようとしてたら要らなかったけど、
みんなにあげてるならありがたくあたしも貰うわ。」

「そう、ならよかった。」

美琴ちゃんはいいい子だな。自分だけが得するのは嫌みたいだ。
不公平は許さず、自らが正しいと思ったことを発言し、行動する。
それはかつこいい事だと思う。まあ、少し猪突猛進などところがある
けど。

それと一応言わしてもらうけど涙子ちゃんには欲しがってたCDを、
飾利ちゃんにはちよつとお高めのパソコン部品を、
黒子ちゃんには媚薬びやくを買ってあげた。
ちなみに、黒子ちゃんが媚薬を何に使うのか聞いていない。(聞いとけよ)

「で、何が欲しいの?」

「うーん、そうねえ。物じゃないけどいいかしら?」

「別にいいけど?」

「ならあたしと勝負——」

「それだけは勘弁してください。」

「何だよ！あんたお礼がしたいって言っただじゃない！！」

何でよじゃねえよみさかみこと戦闘狂。

たしかにぼくはお礼がしたいと言いました。
でも、闘うのだけは厭なんだよ。痛いから。

「痛いのは苦手なんだよ。」

それに、どうしても闘いたいなら哀川さんとかいるけど……」

「潤さんかあ、それもいいわね。」

でも、あの人は殺しても死ななそうで怖いしなあ、どうしようかな
」。

哀川さんにも喧嘩売るのがこの娘は……。

君はいつたい何処までたにかいたがり戦闘狂何だい？美琴ちゃん。

それに人を人外みたいに扱うのはどうかと思う。

たしかにあの人は遙か上空からパラシュートなしに落ちてても無傷だし、

ワイヤーが焼き切れる程の高電圧を受けてびんびんしてるような人
だけど、

最強の超能力者にも、最強の魔術師にも勝てそうな人だけど、
人外扱いをしていいとは限らない。人外というより寧ろ超人の部類
だろう。

場合によっては人外も超人も大して変わらないが、
まあ、そこは響きの問題ということで勘弁。

「だいたいねえ——」

「何してんだ『ビリビリ』。」

美琴ちゃんが何か言おうとしたところで
見知らぬ少年がその台詞を遮った。

「あ、あんた——」

「誰？」

「あ？オレか？オレは上条当麻だ。アンタは？」

「ぼくは名も無き戯言遣い。

いーちゃんでも欠陥製品でも

好きなように呼んでくれてかまわないよ。」

「ああ。よろしくな、いの助^{すけ}！」

「こちらこそよろしく、当麻くん。」

それにしてもいの助かあ。

あの骨董^{おんぼろ}アパートの住人以外に

その名を呼ばれるとは思ってなかったなあ。

「あたしを無視すんな！何であんたがこんな所にいんのよッ！？」

美琴ちゃんが当麻くんに質問する。

まあ、男が女の子物の服売り場にいたら誰だって疑問に思うわな。
ていうか、二人とも面識あるんですね、今知りました。

「いちゃいけないのかよ。それに何でって言わ——」

「おにいーちゃん！」

少し後ろから女の子の声がした。

「あ！トキワダイのおねーちゃんだ！！」

「あ、かばんの……」

美琴ちゃんはこの子とも面識があるようだ。

後で聞いた話なのだが、美琴ちゃんはこの子のかばんを水浸しになってまで守ろうとしたらしい。何でも爆弾と勘違いしていたとか。

ああそれと、ここ最近学園都市ではぬいぐるみや子供用のかばんに爆弾が仕込まれている事件が^{ジャック}続発しているとか。

場所も時間も関連性が無く風紀委員にも怪我人が出ているらしい。美琴ちゃんが勘違いしたのはこれが理由らしい。

「お兄ちゃんってあんた妹がいたの！？」

「違う違う。」

オレはこの子が洋服店探してるって言うから
セブンスミストまで案内してあげただけだ。」

「あのね、お兄ちゃんに連れてきてもらったんだあ。」

わたしもテレビの人みたいにお洋服でおしゃれするんだもん。」

可愛い……。じゃなくて、何か年相応の振る舞いをする子を久々に見た気がするよ。

崩子ちゃんほろこちゃんは生まれた環境が特殊な所為か発言やらが大人びてるし、
姫ちゃんひめちゃんは——って姫ちゃん高校生だった。
姫ちゃんは高校生の癖に子供っぽいところが多いせいで
最高でも中学生くらいにしか思えなかったんだよねあ。

「そうなんだ。今でも十分おしゃれで可愛いわよ。」

「短パンの誰かさんと違つてな……。」

「何よッ！ヤル気！？」

だったらいつぞやの決着を今ここで——」

「ストップ、ストップ。駄目だろ二人とも喧嘩しちや。」

美琴ちゃんはこのな所で能力を使おうとしない！周りの人の迷惑になるだろ？

それに当麻くんも人を煽るような発言は控えめにしなきゃ。

分かったね二人とも？」

ていうか美琴ちゃんお嬢様なのに短パン穿いてるんだ……

しかも決着つて美琴ちゃん、君は当麻くんにも戦いを持ちかけたことがあるのかい？

「わりい……。」「

「こっちこそ熱くなりすぎたわ……。」「

「よろしい。」「

閑話休題

当麻くんは女の子が、あっちも見たいと言ってきたのでそれに付いて別の服売り場に行ってしまった。

当麻くんがどこかに行ってしまったのと同時に飾利ちゃん達が戻ってきた。

それからしばらく話をしていると飾利ちゃんの携帯が鳴った。

「初春、携帯鳴ってない？」

「ほんとだ……。はい、もしもし——」

『初春ッ！^{グラビトン}虚空爆破事件の続報ですのっ！！』

飾利ちゃんの携帯から黒子ちゃんの声が聞こえる。よほど焦っているのか、声が大きい。

「え……。？」

『学園都市の監視衛星が重力子の爆発的加速を観測しましたの！』

何言ってるのかぼくには分からないけど、

虚空爆破事件の続報ってことは爆弾魔がまた出たのだろうか。

「か、観測地点は！？」

『今は近くの警備員を急行させるよう手配しています。^{アンチスキル}
貴女は速やかにこちらに戻りなさい！』

「ですから、観測地点をッ！！」

『第七学区の洋服店“セブンスミスト”ですの！！』

一瞬時が止まった気がした。

おいおいおい、セブンスミストって此処じゃないか。

今までの場所と違って大型の洋服店だから、

人も多いしこのままじゃ怪我人どころか死人が出かねないぞ。

「セ、セブンスミスト……」

丁度いいです。私、今そこにいます。

すぐ避難誘導を開始します！」

『ちょ、初は——』

飾利ちゃんは黒子ちゃんが何かを言おうと

しようとしたのを無視してピツと電話を切る。

そしてこつちを向いて口を開く。

「落ち着いて聞いてください。

爆弾魔^{はんにん}の次の標的が分かりました——この店です！」

「え……」

「な、なんですって!？」

涙子ちゃんと美琴ちゃんが驚きの声を上げる。

まあ、世間を賑わす爆弾魔が

自分たちのすぐ近くにいると分かれば驚いても仕方ないか……。

「御坂さんといーたんさん、すみませんが避難誘導に協力してくだ

さい。」

「わ、わかったわ。」

「了解。」

「佐天さんは避難を。」

「・・・うん。初春も気をつけてね。」

このとき涙子ちゃんが少し辛そうな顔をしていたのは
きつと見間違いではないだろう。

友達が、親友が、仲間が危険な状況にいるのに自分は何も出来ない。
ただ一つ、出来るとしても、

邪魔にならないように、

迷惑にならないように、

足手まといにならないように『逃げる』事しか出来ないのだ。

それほどつらい現実はないだろう。

それほど悲しい現実はないだろう。

それほど苦しい現実はないだろう。

それほど淋しい現実はないだろう。

それほど残酷な現実はないだろう。

それなのにぼくは何もしてやれない。

ぼくと美琴ちゃんと飾利ちゃん以外の全員避難が

終わったところで飾利ちゃんが黒子ちゃんに電話を掛ける。

「全員避難終わりました。」

『初春！今すぐそこを離れなさい！』

「え？」

『過去の人的被害は風紀委員だけですの！』

爆弾魔の真の狙いは観測地点周辺にいる風紀委員。

今回の標的は貴女ですよ、初春！！』

そうか、犯人の狙いが風紀委員なら場所も時間も関連性がないことに納得がいくし、辻褄が合う。

風紀委員は非番の日以外は腕章を着けて行動するので風紀委員を探し出すのは容易なことだ。

そして風紀委員は非常時においては一般人を最優先するので一般人に被害が及ぶことなく

風紀委員だけを攻撃できる。

何ともせこくて、ずるくて、酷くて、腐ったやり方だろうか。

狙ったようなタイミングで避難したはずの

当麻くんといったあの女の子がこっちに向かって走ってきた。

嫌な予感がする。

「避難しなきゃ駄目でしょ。今此処は危ないんだから。」

「ごめんなさい……。」

でも、メガネを掛けたおにいちゃんが

じゃっじめんとのおねえちゃんにコレ渡して。はい。」

そう言って女の子は飾利ちゃんにカエルのぬいぐるみを渡す。

しかし、飾利ちゃんに渡った途端、カエルのぬいぐるみに変形し始めた。

やばいやばいやばいやばいやばいやばい。

きつとあれが爆弾だろう。どうにかしないと、どうにかしないと。

ぼくが焦っている間に飾利ちゃんも気が付いたのか、ぬいぐるみを後方に投げ、

女の子を包む様に、守る様に抱き締めながら美琴ちゃんといつの間にか近くに

いた当麻くんにぬいぐるみが爆弾であると呼び掛けている。

しかし、本当にどうしようか。ぼく的能力は言うなれば受け身の能力、

ここでは爆弾が爆発してからしか使えない。

爆発後にぼく的能力を使えば生きてこの店を出られるだろうが身体は無事でも、

爆発を、死に至る熱風を受けたならば精神は無事では済まないだろう。

悩んでいるうちに爆弾であるぬいぐるみはどんどん変形、圧縮されていく。

「（くっ、超電磁砲で爆弾ごと——）」

美琴ちゃんの手から一枚のコインが零れ落ちる。

超電磁砲で爆弾を消そうとしたのだろうがそれも無理になってしま

った。

もう、爆弾を止めることは不可能だろう。覚悟決めるしかないか……。

あーあ、十三階段——狐さんとの闘いで『正義の味方』

になるって決めたのに、

これじゃあ何も変わってないじゃないか。

結局、ぼくには『イフナツシンググイズなるようにならない最悪バッド』の称号が、

『無為式むゐしき』の性質が相応しいようだ。

そしてぼくが自虐の真っ只中にいる内にぬいぐるみという名の爆弾は爆発した——

が、爆風がぼく達に襲ってくる事はなく、代わりに当麻くんが爆風に向かって自らの右手を

突き出していた。

右手を突き出す——ただそれだけなのに爆風は一部だけではあるが、消滅していた。

しかし、何かがおかしい……いや、何かもおかしい。

先程の会話には出ていなかったが、当麻くんはレヴェル0——

——無能力者と聞いた。

それなのに今、目の前で起こっていることは異常で異様すぎる。

「当麻くん、君はいつたい何者なんだ……。」

ぼくの呟きは誰に聞こえるわけでもなく爆音の中へ消えた。

「初春無事だったんだ。よかった。」

ぼく達が無事出てきたので、涙子ちゃんは真っ先に駆け寄ってきた。あの時の様な暗い表情は見えない。

「もお、心配しましたのよ。」

そして、涙子ちゃんが駆け寄ってきてしばらくしてから
黒子ちゃんが空間転移テレポートでぼくたちの目の前に現れた。
親友の緊急に慌てていたのか、かなりの汗を？いている。

「ごめんなさい。でも、御坂さんといーたんさんのお陰で
ほお——ら、この通り無事で済みました。」

「トキワダイのおねえちゃんと
ざれごとつかいのおにいちちゃんが助けてくれたの！」

実際はぼくも美琴ちゃんも避難誘導以外は何も出来ちゃいない。
爆弾に関してはぼくは能力をどう使えばいいかわからなかったし、
美琴ちゃんは爆弾を喰い止めるのに失敗した。

しかし目を瞑っていた二人はぼくと美琴ちゃんが助けたと勘違いしている。

二人を助けたのは当麻くんなのに。

「かつこよかったねー」

「「ねー」」

だからそんなのじゃないのに――
何も出来やしなかったのに――
そんなぼくをかつこいいと言わないでくれ――

話は変わるが今、美琴ちゃんはここにはいない。
爆弾魔のところに行ってしまったのだ。

ちょっと犯人のところに行つて来る、とコンビニに行くような軽い
伝言を残して。

世間を賑わす爆弾魔に対してその反応は軽いなあ、軽すぎる。
もはや、コンビニが浮きそうなくらい軽い。
まあ、でも美琴ちゃんだし大丈夫だろう。
あんなのでも一応レヴェル5だしね。

そして三十分後、犯人を捕まえたというメールが美琴ちゃんから来
た。

ようやく、世間を賑わした虚空爆破事件は犯人の逮捕という形で終
息を向かえた。

人類最強の宅配人：哀川潤

家に帰ると哀川^{あいかわ}さんが零崎^{ぜろさき}と舞織^{まいおり}ちゃんを椅子代わりにしていた。

戦闘の敗者である二人はフローリングの床の上で四つん這いになり、零崎は哀川さんが直接腰掛けており、舞織ちゃんはオットマンにされていた。

皮肉なことに、女子にすれば少し高めの舞織ちゃんの身長は、丸まってみると哀川さんの長い脚を置くのに丁度いいサイズになっていた。

何処のドS女王様だよ……

「おかえり、いーたん。」

「ただいんです、潤さん。何してるんですか、貴女は……」

「殺人鬼二人を椅子代わりにして遊んでる。ちなみにコレするのは二回目だ。」

二回目って、いつの間に……

「前にしたのはいつですか？」

「真^ま心^{こころ}ちゃんとの闘いで入院しているところにこの二人に押し掛けられた時さ。」

哀川さんは笑ってそう言うがあの時の哀川さんは満身創痍だったは

ずだ。

それでも殺人鬼二人を返り討ちにしたってことは……………

「どれだけ強いんですかあなたは……………」

「強いんじゃない。最強なのさ。」

最強ねえ……………

やっぱり、哀川さんにしか似合わない称号なんだろうな。

それにしても、零崎の二人は何で黙ったまんまなのさ……………

「おい、人間失格。お前らはこれからどうするつもりだ？」

「……………」

「……………」

零崎どころか舞織ちゃんも反応がない。

ただの殺人鬼のようだ……………。

何だよ、ただの殺人鬼って。

「あー、いーたん。今その二人に話しかけても無駄だ。」

哀川さんは面倒臭そうに話す。

「何ですか？」

「二人とも気絶してるから。」

気絶してるのかよっ！

どつりで返事がないはずだ……。

ていうか、哀川さんは気絶してる人間を椅子代わりにしてたのかよっ！！

あんたは鬼か！

……というか、気絶してた状態でよくその姿勢を保てたな！
それが今日の一番の驚きの事実だよ！！

「人間じゃなくて殺人鬼だから問題ねえぞ？」

駄目だ、この人はいろいろ屁理屈^{へりくつこ}扱いてやめる気はなさそうだ。
うん、もう、放置しておこう……。
ぼくは何も見てません。

「で、その二人はどうするつもりですか？」

「どっかに送り付けるわ。」

うわー、何処に送るにしたって殺人鬼なんかを送り付けられたら迷惑だろうな！。

「どこにです？変な所は止めてくださいよ。」

「刑務所（笑）」

たしかに、変な所じゃないですけど！

でも、殺人鬼ヒトゴロシが刑務所に行ったら生きて帰って来れなくなるから！

「刑務所というのは冗談で、実際は文月学園ふみつきがくえんに送り付ける。」

何処かに送り付けるのは冗談じゃねえのかよ。

ドンマイ零崎のお二人さん……。

「文月学園って何処に在るんですか？

というかなんで殺人鬼みたいに危ない二人を学校なんて人が
密集する場所に送り付けるんですか？

羊群れの中に狂犬を放つようなもんですよ。」

「矢継ぎ早に質問してくんな、殴るぞ。

……まあ、殺人側そっちがわに関してはあたしとの
『約束』があるし、まあ、大丈夫だろう。」

「そう言えばそういうものもありましたね。」

「ああ、それに文月学園の学園長が面白い餓鬼がきが
いたら紹介してくれて言われてたしな。」

確証はないが、もう人を殺さないといえ殺人鬼を
面白いの一言で済ますのはどうかと思う。

あーそうそう、と哀川さんは思い出したように言う。

「文月学園ってのは科学とオカルトと偶然によって開発された

『試験召喚システム』つーのを試験的に採用しててな、まあ、世界的にも珍しい学校なんだ。

で、そんな摩訶不思議な所に人を殺せない殺人鬼を送り込んで改心させよう——って試みた。」

少しイイ話っぽく聞こえたけど、

まあ、哀川さんが殺人鬼の改心なんてイイことを考えるはずがないので……

「嘘でしょう?」

「うん。」

即答かよ……

嘘をつくならせめて隠すことくらいしましょうよ……

「お、そろそろ行くわ。もうすぐ時間だしな。」

哀川さんはぼくの部屋の時計を見ながらそんな事を言う。

「もうすぐ時間って言ってますけど、何かあるんですか?」

「もうすぐタイムマシンが来る。」

ちよ、タイムマシンって、おい!

あんたは未来から来た猫型ロボットの面識があるのか!?

「マジですか?」

「嘘(笑)」

哀川さんは笑いながらさういう。

はあ、まったくこの人は……。何というか自由だな今畜生。口論とか何でもいいから、この人に勝てる方法をぼくに教えてくさい。

もしくは、助けてください。お願いします。

それだけがぼくの望みです。嘘だけど。

「そんじゃ、あたしは帰るわ。」

お相手は『人類最強の請負人』哀川潤でしたー」

いつ其処まで移動したかは知らないけど、

哀川さんは零崎の二人を担いで帰ってしまった。

哀川さん、その終わり方気に入ってるんですか？ぼくには関係ありませんけど。

それにしても哀川さんはあの二人を文月学園とか言うところに送りつけるつもりなのだろうか？

……。哀川さんならやりかねないな。

だって、ぼくを学園都市に送り付けて、その上、大学生のぼくを中学校に転校させるような人だしな。

たぶん、あの二人は文月学園に入学させられるな。哀れ……。

ぼくは哀れな零崎兄妹の今後のことを考えながら眠りについた。

まあ、戯言だけだね。

幻想御手

ぼくと美琴^{みこと}ちゃんはタクシーに乗り、『ある場所』を目指していた。

「運転手さん、もっとスピード出して！」

美琴ちゃんはイラつきながら、焦りながら、タクシーの運転手に言う。

「これが限界ですよ。」

運転手はそんな美琴ちゃんにおどおどしながら
規制速度に引つかからないギリギリの速度で運転する。

「美琴ちゃん少しは落ち着きなよ。」

美琴ちゃんに落ち着くよう、言ってみるが美琴ちゃんがそんなことを聞くわけも無く、

「嫌よ！友達のピンチだっていうのに落ち着いてられる訳がないでしょー！！」

と、怒鳴り散らす。

美琴ちゃんがこんなに慌てているのはある理由があるのだが、
今ここで説明するより少し過去を振り返ったほうが早いと思うので
回想に入ろつと思う。

以下回想

昼頃にいきなり飾利ちゃんから『涙子ちゃんが倒れた』と電話が入った。

なんでも、幻想御手レヴェルアップを使っただけらしい。

幻想御手とは言うなれば能力者のレヴェルを簡単に上げてくれる代物らしい。

しかし、代償として使用者は全員例外なく昏睡状態こんすいに陥るが。

それを聞いてぼくは急いで涙子ちゃんのいる病院に向かった。

病院でぼくが見たものは安定した速度で一定の呼吸をしながら眠る涙子ちゃんと、

泣いていたのか目が赤く腫れている飾利ちゃん、

そして、友達の苦しみに気付いてあげられなかった罪悪感に押し潰されそうに

なっている美琴ちゃんと黒子ちゃんくろこがいた。

「・・・・・・・・」

そんなみんなを見てぼくはどんな言葉を

かけてあげたらいいか分からなくなっていた。

しばらくして、

「あのね、佐天さんね――」

自らの罪を懺悔するように美琴ちゃんは語りだした。

今、飾利ちゃんは病院にいない。

涙子ちゃんを助ける為に木山さんの所に行ってしまったのだ。絶対に佐天さんを助けるんだ。と、その言葉を残して。

これからどうするか悩んでいると、

「ちよつと良いかい？」

後ろから呼びかけられたので振り返ってみると人間大のカエルがいた。

まあ、人間の大きさのカエルなんている訳がないので人間だろう。それに白衣を着ているし、医者なのだろうとは思っけ。

「ぼくたちに何か御用ですか？」

「ああ、そうだよ。それに立ち話というのもなんだし、ちよつと着いて来てくれないかい？キミたちに見せたいモノもあるしね。」

そう言われて着いて行き、ぼく達は一つの部屋に入っていた。

其処には壁に貼られたおびただしい資料と、電源の点いている業務用パーソナルコンピュータが一台あるだけだった。

「『これ』を見てくれないか？」

カエル顔の医者はおく達が見やすいようにパソコンの液晶画面の向きを変える。

「これは幻想御手被害者の全脳波パターンだ。
脳波は個人個人で違うから同じ波形なんてありえないだね。」

まあ、そうだろうよ。そうでなくちゃ、いろいろ問題になるだろうしね。

もし、そんなことがありえたとしても、
哀川さんと同じ脳波パターンの人は絶対に現れない、そう断言できるね。

「ところが、幻想御手被害者には共通の脳波パターンがあることに気が付いたんだよ。」

たくさんの幻想御手被害者の脳波パターンを見、データを取ってきたとは言え、

よくもまあ、そんな細かいところに気が付いたもんだよ…………。

「どういう事ですか？」

「誰か他人の脳波パターンで無理矢理脳が動かされているとしたら、人体に多大な影響が出るだろうねえ。」

「幻想御手に無理矢理脳を弄いじられて植物状態になった、って事？」

「誰が何のつもりで……………」

それをばくらや風紀委員、ジャッジメント警備員が調べるんじゃないのか？

「ボクは医師だ。」

それを調べるのはキミたちの仕事やるべきことだろう？」

ぼく達は今、カエル顔の医者に借りた幻想御手被害者の脳波パターンの資料もとに風紀委員の支部のパソコンを借りて、今回の事件の首謀者の特定に当たっている。

「出ましたわ。脳波パターン一致率99パーセントですよ！」

「って、この人——ッ！」

美琴ちゃんが驚くのも無理はない。

何せ、今回の幻想御手首謀者（犯人）はぼくたちのよく知る人、木山春生だったのだから。

「初春さんが危ない——」

「連絡を——」

みんなが焦り始めると同時にブルルルルと誰かの携帯が鳴る。黒子ちゃんのだ。

「はい、もしもし——え……？」

黒子ちゃんがいつになく動揺している。

嫌な予感がする……。

「何かあったの？」

「それが――」

電話の内容は『飾利ちゃんが木山春生きやまはるみに誘拐された』と、いつもの
だった。

回想終了

そして冒頭に戻る。

「ここまででいいわ。ありがとう。」

「あ、御釣おつりはいらないです。」

煙が上がっているのが見える場所まで来たところで、
タクシーの運転手が危なくなってきたのでばくたちはタクシーを降
りた。

おそらく、あそこに木山春生がいるのだろう。

階段を駆け上がって見ると、

「嘘……」

「・・・・・・・・」

其処には氣絶した警備員で作られた山と、

「ふふふ、遅かったな・・・・・・・・」

木山春生が不気味に笑っているだけだった。

木山春生（前書き）

久々の更新です！

木山春生

「一応訊いておくが何の用だい？」

きやまはるみ
木山春生は問う。

「ういはる初春さんやさてん佐天さん、レヴェルアップバーひがいしや幻想御手被害者のみんなを助けるためにアンタを捕まえに来たのよ！」

と、みさかみこと御坂美琴は答える。

「助ける、か……。私の計画の邪魔をするのなら容赦しないぞ？」

「望むところよ！」

ぼくもいるのに勝手に望まないでください。

まあ、言っても訊きはしないだろうから言わないけどね。

それにしても、『計画』ねえ。

何を考えているのやら。まあ、ぼくには関係ないけどさ。

「此方から行くぞ。」

木山春生がそう言ったと同時にアンチスキル警備員が乗ってきたであろう車が数台飛んできた。

「何飛ばしてんのよ、下手したら死ぬじゃない！」

美琴ちゃんは悪態をつきながら電撃で勢いを殺し、その間にバックステップで避難する。

ちなみにぼくはこっち側に飛ばしてきた車の空間を『なかったこと』にして被害を免れた。まねが

はあ、容赦しないといってもこれは流石さすがに死ぬでしょ？ 哀川あいかわさんと真心まごころ以外は。

・・・うん、あの二人なら大型トラックに押し潰されても無傷な感じがする。

「な・・・ッ!？」

「何だと!？」

車が急になくなったことに驚いたのか美琴ちゃんと木山は同時に声を上げる。

「アンタ、一体何をしたのよ!!」

「何って・・・車ごと空間を『なかったこと』にただけだよ?」

今ぼく、サラッとすごいこと言った気がする。というか、言ってしまった。

「空間って・・・アンタそんなことも出来るの!？」

「一応ね。」

そう、一応は出来るのだ。

しかし、小範囲の空間しか『なかったこと』にできないし、

それに精神力と言うか体力がごっそり持っていけるのだ。

そのうえ、一日二回までしか使えないという回数制限であるのだ。

しかしまあ、今はそんなことを話している場合ではないのだ。

「・・・でも、今はそんなことを訊いている場合じゃないだろう？」

「それもそうね・・・。」

さつさと木山を倒して佐天さんや他の幻想御手被害者たちを助けましょ。」

「よし、ぼくが飾利ちゃんを助けてくるから、

美琴ちゃんは木山の相手をお願いするけどいいかい？」

「いいけど・・・。」

アンタ、何気にめんどくさい役割をあたしに押し付けたわよね。」

「・・・気のせいだよ。じゃ、頑張つてね。」

ぼくはそれだけ言つて飾利ちゃんの救出に向かった。

「（はあ、まったく面倒くさい役を押し付けてくれたわね。

あとで、なにか値段のたかあいものでも奢^{おご}つて貰^{もら}うとしましょ。

取り敢えずは目の前にいる敵に専念しないとね。）」

そう思い、御坂美琴は木山春生から目を離さないようにする。

「もう一度言っておくが私の邪魔をするのなら容赦はしないぞ?」

木山がそう言ったかと思つたと同時に木山を中心に、橋が崩れ始めた。

木山は自身を基点とし、ソニックブーム衝撃波で橋のみを破壊したのだ。

そして美琴は、

「え!?!ちよ……ッ!?!ちよおおおおおお——!?!?!」

橋の下へと落ちていった。

ぼくは木山を美琴ちゃんに任せて(押し付けて)飾利ちゃんを助けに来た。

飾利ちゃんは木山が乗ってきたであろう車の中で気絶していた。

「飾利ちゃん無事ツ!?!」

「……………」

「いーたんさん、どうしてここに?それに木山さんは?」

「どうやら、飾利ちゃんは無事のようなだ。」

それに見たところ目立つた外傷は無いようだし、よかったよかった。

「どうしてって、飾利ちゃんを助ける為に決まってるじゃないか。木山春生については一緒に来てる美琴ちゃんが相手してるよ。」

「そうですか……。あッ！いいーたんさん『これ』を見てくださいー！」

そう言つて、飾利ちゃんはぼくに何処にでもあるようなメモリカードを見せてきた。

「これは？」

「これは『幻想御手をアンインストール』するデータの入ったメモリカードですー！」

「……え？幻想御手をアンインストールするだつて？
どうしてそんなものが……」

「どうして飾利ちゃんはそのものを持つてるのさ？」

「それは……。木山さんが私に渡してきたんです。」

何を考えているんだ、あの人は……。

木山によつて橋の下へと落とされた美琴は自身の足に磁場を作り出し、

橋の柱に蜘蛛くもの様に張り付いて地面に衝突するのを回避し、
木山との戦闘を再開していたが、美琴は苦戦していた。

超能力者である御坂美琴と研究者とは言え、一般人の木山春生が勝負したのであれば、

どちらかが勝つか目に見えているのだが、

レヴェルアップバー

木山は幻想御手によって作られた能力者の脳のネットワークを応用し、

自らに能力を発生させ、様々な能力を使って、美琴をほんろう翻弄していたのだ。

木山は、電撃が来れば自身の周囲に避雷針のようなものを作り出して回避し、

サイコキネシス

砂鉄による攻撃が来れば念動力で周囲の瓦礫がれきを盾にして防御していた。

さらに、堂々巡りに疲れてきたのか、美琴の攻撃はストップしていた。

「どうした、攻撃してこないのか？こちらの攻撃は止まっているぞ？」

「ああ……もう！！鬱陶うつとうしいわね！」

しかも、美琴が攻撃を止めると木山はそれに合わせて攻撃を停止させる。

レヴェル5の美琴からしてみたら嘗なめられているのも当然なので、かなりのフラストレーションが溜まって、仕方がないのだ。

ただ問題なのが、イラつきより、美琴の顔が半分鬼神顔になりつつあるという事だけだ。

「そろそろ、終わりにしようか……。」

木山がそういった途端に、大量のアルミ缶が美琴に向かって飛んできた。

「（アルミ缶・・・——まさかッ！！）」

美琴が防御の姿勢を取ったと同時に大量のアルミ缶が凄まじい轟音を響かせながら爆風を周囲に撒き散らした。

＊ ＊ ＊

「呆気ないものだ・・・。。」
レウエルファイユ
超能力者、と言っても所詮は子供、か・・・。。」

木山は瓦礫に埋もれピクリとも動かない美琴を見下しながら言う。
その顔は一つの障害がなくなった喜びと、あともう一人、
この少女よりも厄介な敵が残っているという事実_{（トク）}に気だるさを感じ
ているだけだった。

「さて、私はもう一人の所に行くとするか・・・。」

木山は自らの目的を邪魔するもう一人のもとへと歩を進めた——
——はずだった。

しかし、歩を進めようにも身体が動かないのだ。

それもそのはず、木山の腹辺りに腕が巻きついて離そうしない。
それに、零距离でピッタリとくっつかれているものだから動くこ_{（トク）}に
も動けないのだ。

しかも、

「くっ——！なぜ、貴様がそこにいるのだ

『御坂美琴』——！」

木山の動きを封じているのが、先ほど木山が倒したはずの御坂美琴なので

木山は混乱して先ほどまで美琴がいたであろう場所に目を向けてみると、

即席で作られたであろう盾らしきものがあつた。

美琴は木山の質問には適当に答え、木山を逃がさない為に抱きしめる力を強める。

「さあね。零距离からの電撃……、あのバカ二人（戯言遣いと不幸少年）には効かなかったけど、いくらなんでもあんなトンデモ能力なんて持ってないわよね？」

木山はこの先のことを予期して抵抗しようとするが、

「遅い！」

美琴は隙を与える、なんてことはせずに木山に電流を流す。

「ぐああああああああああああ——！！」

美琴の電流を浴びた木山は断末魔にも似たような雄叫びを上げ、気を失った。

「一応手加減はしたけど、これでもう戦闘不可能なはず。」

『センス――』

「！！！？何よ今の！？」

気のせいかしら？美琴はそう思った。

『木山センス――』

が、

気のせいではなかった。

それどころか、今度ははっきり聞こえた。

「頭の中に直接・・・」

美琴の頭の中で木山の過去が再生され始めた。

美琴ちゃんが闘っているところ辺りで雷が落ちた様にも見えた。
おそらく、あの一撃で美琴ちゃんは勝利しただろう。

それは悦ばしいことなんだか、何か嫌な予感がする。
どうしようか・・・、うん。

危険な芽は摘んでおかないと。備えあれば憂いなし、ってね。

「さて、美琴ちゃんは木山春生に勝ったようだし、今の内に飾利ちゃんは気絶してる警備員の人たちを起こしておいてくれない？」

「ぼくは美琴ちゃんの所に行つて来る。」

「どうしてです？」

「ちょっと嫌な予感がね……………」

「嫌な予感ですか……………」

「何も無いと良いですけど、気を付けて下さいね。」

「うん、じゃあ行つて来るね。」

「ぼくは飾利ちゃんを残して美琴ちゃんの所に向かった。」

「な、何なのよ、い……………今は……………?」

「美琴が混乱するのも仕方がない。」

「何故なら、美琴が木山に電流を流した同時に自分の頭の中に他人の記憶が流れ込んできたのだ。」

「それも、学園都市の闇とも言えるものだ。」

「少し内容を語るのなら学園都市捨てられた幼い子供、
『置き去り』
が
モルモット
能力開発の実験体にされる、というものだ。」

「美琴が木山の過去と学園都市の実態に驚愕きょうがくしていると、木山は目を

覚ました。

「観ら、れた、のか……………!?」

「何であんな事……………」

「くっ…………フ、フフフフフ。良いだろう教えてやろう。

あの実験の正体は『暴走能力の法則解析用誘爆実験』。

能力者のA I M拡散力場を刺激して暴走の条件を操るものだったんだ。

あの子達を使い捨てのモルモットにしてね。」

「人体…………実験…………。」

だ、だったらそれこそ警備員に……………」

「23回。」

木山が美琴の台詞を遮って言う。

「あの子達の恢復手段を探るため。
かいふく

そして事故の原因を究明するシュミレーションを行つために、
ツリーダイアグラム
『樹形図の設計図』の使用を申請して却下された回数だ。」

「……………」

「統括理事会がグルなんだ。警備員が動くわけがない。」
とうかつりじかい

ぼくが美琴ちゃんのもとに駆け付けたときには木山は気絶していて、その代わりに何か、ものすごい奴がいた。

え？怪獣映画ですか、これは。

・・・な訳ないですよね・・・はあ、これと闘えってことですか？

「はあ。」

状況が状況なだけに溜息が出る。

しかし、こんな所で立ち止まってる訳にもいかないし、いっちょ頑張りますか。

でも、やっぱり、

「戯言だよ。」

こう言いたくなるね。

こうして、ぼくは生まれて初めて、人バーサス怪獣の決闘を演じる

ことになった。

作戦会議

「どうする？美琴ちゃん。」

「どうするもなにも、敵っぱいからとりあえず攻撃してみない？」

とりあえずとかいう曖昧なもので正体不明なモノを攻撃しようとするんじゃないません。

「一応、様子見てからにしない？」

「嫌よ、面倒くさい。」

面倒くさいって………

「それに、木山春生を倒しはしたけど、今回の事件が終わった訳じゃないのよ。」

そこんとこ分かってる？」

事件は終わってない、か。それもそうだね。

「でも、様子は見ておこうね。」

「……分かったわよ。様子見してればいいんでしょ？でも………」

でも？

「何かこっちに向かって攻撃してこようとしてるけどいいの？」

なん、だ、と。

こっちに攻撃しようとしてきてるとは……………

とりあえず、逃げる！！

只今、逃走中。

今ぼくたちは道路の柱の裏に身を潜めている。

まあ、そんな事よりも大事なのは、

「何であんな大事なことを早く言わないのさ！？」

こういう事だ。

「仕方ないじゃない！アンタずっと話し込んでるし、
アタシが気付いたのだって、アンタに言う直前なんだから！！」

そうだったのか……………。

なんか、美琴ちゃんが悪いみたいなこと言っちゃったな。
謝らないとな。

「ごめんね。完全に美琴ちゃんが悪いみたいな言い方して。」

「いいのよ。分かってくればそれで。」

まあ、でもお……」

よかった。許してくれそうだ。

『でも』が少し引つかかるけど。

「でも？」

「この事件が終わったら、一週間アタシ達のパシリね。

あ、ちなみに拒否権はないから。もし拒否したり、逃げ出したら……」

あー、やっぱり許してはくれなさそうだ。

「……………」

それに、あたし達ってことは飾利ちゃんたちも含めてのことだろう。それはいいのだけど（いいのかよ）、拒否したり、逃げ出した場合のことが気になる。

というか、嫌な感じしかない。

「潤さん呼ぶから。」

死ぬ！そんな事されたら確実にぼくは死ぬ！！

あー、アレだね。美琴ちゃん、段々腹黒くなってきたね。

今なら、イカ墨か、タコ墨でも吐けるんじゃないか？戯言だけど。

「さて。冗談は置いて、作戦でも練る？」

なんで疑問系なんだよ……………。

「そうだね。とりあえず、主に美琴ちゃんが戦って、ぼくがサポートする、」

「って方向でいいんじゃないかな？」

「無理よ。木山春生との戦闘で体力があと半分位しかないから、きつと戦っている内に電池切れになるわよ。」

意外と苦戦してたみたいだし、見た目以上に疲れているのかもいないね。

女の子に無理させるのも気が引けるし、ぼくが頑張るしかないか。

「なら、ぼくが戦うから美琴ちゃんはサポートする役。ってことでよろしくね。」

「不本意だけど、仕方ないか。」

「……………その代わり、アンタが死んだら罪のない人間が69億人死ぬと思いなさい！」

重い！重いよ美琴ちゃん！

それに、その人数が死んだら、世界滅亡だよ……………。

え、何なの？ぼくが負けただけで、世界が滅ぶの？

責任重大な役、ってことは分かるけどそれは重すぎるんだけど！

それに、ぼくには勝つか、死ぬかの未来しかないの？

「——さて。アンタの刑罰も決まった事だし、さっさとあの怪獣を倒すとうしょうか。」

「……………うん、そうだね。……………刑罰って言葉は何かおかしい気がするけど、
気にしないで置くよ（気にしろよ）。」

「じゃ、死なないように頑張らましょ。」

美琴ちゃんがそう言うと、ぼく達は怪物に向かって走り出した。

「あ、罰ゲームをするのはいいけど潤さんだけはやめてね。」

「いやよ。決定事項だもの。それに潤さんにも連絡済よ。」

「……………」

ぼくはこの戦いで勝とうが負けようが死ぬらしい。

AIMバースト

「・・・・・・・・。」

今、ぼくの目の前には幻想御手^{レヴェルアップ}の暴走に

よって作られたAIM拡散力場の集合体、『AIMバースト（木山春生命名）』がいる。

心なしか、こちらを睨んでいる気がしなくもない。

しかし、さつきから無事だった警備員^{アンチスキル}がAIMバーストを

倒そうと攻撃を続けているが被弾したところが再生するどころか大きくなっている。

しかも、攻撃は無視して、こっちを睨みながら（確定）移動している。

そっちに何かあるのか？

まあ、何でもいいか。原子力発電所とかじゃなかったら（笑）

とか思っていたら、後ろの方から

「おい、その少年！早く逃げるじゃん！」

じゃん？変わった語尾だな。

みいさんに似合いそう————じゃなくて、早く逃げろとは一体・・・・・・・・。

「そのバケモノが向かう方向にあるのは原子力実験所だ！」

・・・・・・・・まじで？

逃げたい・・・・・・・・・・とはいっても本当に逃げるわけにはいかないし、戦うしかないか。

さて、どうしたものか。

さっきは美琴ちゃんに大見得切っちゃったけど、

実際の所は特に此れといった作戦はない。断言しよう。

しかし、AIMバーストが向かう方向には原子力実験所。後ろには電撃姫。みことちゃん

戦えば死ぬかもしれない。逃げてでも死ぬかもしれない。どの道逃げ場はないか・・・・・・・・。

あと、どうでもいいけど、後ろから美琴ちゃんが

「アンタ、早く戦いなさいよ！戦わないのなら死になさい！」とか言ってるんだけど、これは無視しておこうか。

うゝゝゝん、どうしようか・・・・・・・・・・あつ、そうだ！能力で、何が出来るか、実験しながら戦おうと。いざとなったら、美琴ちゃんに任せればいいしね。

——では、早速。

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

「すごいわね、アンタ。何か見惚れちゃった。」

褒めてくれるのは嬉しいんだけどさ……、
少しくらい手伝ってくれたっていいだろ！？

なのに、この女はずっとニヤニヤしながら見物してやがった。

「だってアンタ、あの短時間で更地を焦土にしちゃったんだから！」

………美琴ちゃんが興奮している間に回想行きますか。

以下回想

能力の実験って言っても何しようかなあ。

何でもいいか。

「戯言遣いの三分クッキング」（棒読み）

何故似合わないことを言ってるかはあまり語れないが『赤い人』の
所為。とだけ言っておこうか。

・・・いや、あの人なら出来なくもないか（できねえよ）。

「あと、

『電話に出なかった罰として、帰ってきたら死刑が一週間あたしの専属メイドな』」

だって。・・・あれ、どうしたのよアンタ。」

どうしたもこうしたもねえよコンチクショウ。やっぱり、あの電話
哀川さんだった。

化物と戦って逃げたら死刑。生きて家に帰ってもどの道、肉体的か
社会的に死刑が待っている。

何このイジメ・・・もうヤダ。

ああそうそう、話は変わるけど、実験的に闘ったのはいいんだけど、
結果的にあちらこちらにクレーターが出来てしまって、
その所為でさつきも美琴ちゃんが言っていたように

俗に言う（見たままだが）焦土が出来てしまったのだ。

ちなみにAIMバーストは飾利ちゃんかざりが木山から受け取ったアンイ
ンストールデータにより、

ネットワークを破壊され再生できず、そこら辺でピクリともせずに
倒れている。

そのことを美琴ちゃんは回想前のようにやたら褒めてきた。

「そこは褒めるところじゃないでしょ………」

「褒めるところよ!!」

「違うから!」

「ええ——。アンタ頭おかしくなったんじゃない?」

「『え——』じゃない。

それに頭もおかしくなったわけじゃない。至ってぼくは正常だ。」

はあ………。

美琴ちゃんの代わりに戦っただけなのに頭おかしい発言はどうかと思うね。

正直泣きたいよ。嘘じゃない。

事件は終わったと、ぼく達は思い込んで雑談をしていたら木山春生がいきなり叫びだした。

「気を抜くな!まだ終わっていないっ!!」

「は?」

「え?」

まだ終わってないだって?そんな事言われても敵はそこでのびてい

るじゃないか。

それに、ぼくが念入りにダメージを与えたから、それで何ともないとは泣きてえ。まあ、戯言だけど。

「さっきも言ったが、ネットワークの破壊に成功してもあれはAIM拡散力場の生んだ一万人の思念の塊。普通の生物の常識は通用しない！」

木山さんにそう言われたので急いでAIMバーストに目を向けてみると、もうすでに動き出していた。

「じゃあどうすればいいって言うんですか!？」

「核がある。それを破壊すれば――」

あの怪物を倒せるっていうことか。

なら……

「美琴ちゃん任せた！」

「え？あたしい？別にいいけどさあ……」

まあ、さっきまでアンタが戦ってくれてたお陰で体力もだいぶ回復したしね。

それに……、

「？」

「怪物相手ならアタシも全力を出せるし願ったり叶ったりよ！」

うんうん。美琴ちゃんに頼めばやってくれると分かったよ。
だって、この娘玉藻^{こたまも}ちゃんや哀川さんと同類で戦闘狂ですもの。
っーか、願ってたのかよ。

さて、ここは美琴ちゃんど、ついでに木山さんに任せて再度飾利ちゃんのところに行くとしますか。

「頑張つてね、美琴ちゃん。」

「当たたり前よー!!」

うわあ、すごい笑顔…………。

…………ぼくは美琴ちゃんの異常なまでの笑顔を見『なかったこと』にして、

飾利ちゃんのいる方向に向かって走り出した。

決着

「す、すごい………」

と、少女——ういはる かざり初春飾利ちゃんがつぶやく。

何が凄いかというと、AIMバーストみさかみことVS電撃姫の勝負のことな
んだけど、
結果は美琴ちゃんの圧勝ですよ。はい。

美琴ちゃんは磁力で固めた砂鉄でAIMバーストの腕？を全部切り
落としてから、
表面を高電圧で焼き払い、最後に超電磁砲レールガンでとどめ。ってところか
な？

正直見ていて気持ち悪くなりそうだった。いや、実際はならないけ
どさ。

過去に何度も首無しの死体とか見ちゃってるしね……。

あ、思い出したらホントに気持ち悪くなってきた。

猟奇的勝利者である美琴ちゃんは電池たいせいくが切れちゃったみたいで、
地べたで仰向けで寝転がっている。せめてどこかに腰掛けるくらい
はしようさ。

一応女の子なんだしさ。

おっと、こんなこと語っている場合じゃなかったな。

木山春生に聞きたいことがあったの忘れてた。アンインストールシ

システムのこととか。

木山さんはもはや逃げる気がないのか、
それとも馴れない能力を使った所為で動けないのか知らないが地べ
たに座り込んでいた。

「木山さん。聞きたいことがいくつかあるんですけどいいですか？」

「私に聞きたいこと？・・・まあいいだろう。何でも聞いてくれ。」

「まず、ひとつ目です。」

何故、貴女にとって敵であるはずの風紀委員に、飾利ちゃんに
レウエルアップバー
幻想御手のアンインストールシステムの入ったデータチップを渡し
たんですか？」

「君はいきなり答えづらい質問をしてくるのだな。」

大抵の人間は何故この事件を引き起こしたかを聞いてくるものなん
だがな・・・。」

と、木山さんは困った風な顔をしながら言う。

まあ、それも聞きたいところなんだけど、少し気になる程度だし、
別に聞かなくてもいい正直問題ない。

「まあ、いいさ。それに関してはいつか分かる日が来るさ。」

「・・・おっと、話が脱線してしまったな。」

「そのことなんだがな……それは私の単なる気まぐれだ……」

「……………」

気まぐれねえ。きっとそれは木山さんの嘘だろうなあ。

でも、これ以上聞いても同じ返事しか来ないだろうからこの質問は諦めるしかないかなあ。

まあ、ぼくが一番聞きたいことはこれじゃないからそこまで粘る気はない。

「じゃあ、ふたつ目の質問です。」

「貴女は狐面の男、西東天と何か関係があるんですか？」

そう、この質問が今回の本題だ。

初めて木山さんに出会った日の別れ際に聞いた『縁が《合った》』というあの単語は、

言うなれば知っている人は知っている、

知らない人は全くわからない狐さんの決め台詞、ぜりふと言うか口癖だ。

そして、その台詞を使っているあたり、

多少の『縁』はあるだろうがどこまでかが分からない以上軽視はできない。

「あの人を知っているのか君は……。以外、と、言うか驚きだな。……あー、そうそう。その事なら大した理由なんてものはないさ。」

「と、言いますと？」

「ただ単に私の父、木山冬慈と西東天が『幼なじみ』だった。と、いうだけさ。」

ついでに言っていると私も幼い頃から西東さんに遊んでもらったこともあったしな。

しかし、その分愚痴も聞かされたがな。」

その台詞にぼくは言葉を失うしかなかった。

『あの』西東天に幼なじみだと？

・・・いや、幼なじみ自体はいても可笑しくはないが、狐さんの幼なじみの娘と、宿敵であるぼくが出会うのは少し出来過ぎてないか？

いや、今は気にしても仕方ないか・・・。

しかし、一応念のたぐいに対策でも考えておくとするか。こればかりは戯言ではないと断言できる。

とか、いろいろ考えていたら木山さんがぼくに質問してきた。

「さっきまでの話で君と西東さんは『縁』がある様だが、いったいどういう関係だ？」

「どういう関係って言われましても単にぼくが狐さんの宿敵だったというだけですよ。」

「『だった』というのは・・・。」

「そのままの意味ですよ。」

ぼくが少しはぐらかして言うと木山さんは、

「そうか・・・・・・・・・・。」

何か納得がいけないという顔しながらも、渋々納得してくれた。

「話はそれだけか？」

「・・・そうですね。これくらいにしておきます。」

「そうか。」

こうして、ぼくの木山春生に対しての全ての疑問は無くなった。

今のところは、だけど。

そして数分後、回復した警備員が
アンチスキル

木山さんを連れて行く為に、護送車と共にぼく達の前に現れた。

「さあ、早く乗るじゃん。」

やばい。シリアスな場面な筈なのに、この人の口調の所為で色々台無しだ。

シリアスな雰囲気かものの見事に消えてなくなってしまった。

しかし、木山さんは笑う事無く、仏頂面で護送車へ歩みを進めていた。

木山さんが護送車に乗ろうとしたところで美琴ちゃんが声をかけた。

「アンタ、これからどうするつもり？」

今の私には歩く力はあっても、アンタを止める力はもう残ってないわ。

まあ、その『バカ』はどうかは知らないけどさ。」

「・・・君は私を止めるつもりはないだろう？」

木山さんは確認するかのように聞いてきた。

何でばれたのかなあ・・・。

「はい。」

「そう言うと思ったぞ。それにどうするかって、そんなの決まっている。」

もう一度、最初からやり直すさ。

刑務所の中だろうと、世界の果てだろうと、私の頭脳はここにあるのだから。

——ただし、今後も手段を選ぶつもりはないぞ。

気に入らなければ、その時はまた邪魔しに来たまえ。」

「アンタねえ・・・全然懲りてないでしょ？」

「フッフ」

木山さんは言いたいことを言いたいだけ言って、笑って護送車に乗り込んでいった。

そして、木山を乗せた護送車はあるべき所に向かって消えていった。

あーあ、凄いなあ木山さんは。堂々とみんなの前で宣戦布告していきやがった。

とんだ大物だよアンタは……。

しかし、これでぼく達は嫌でも木山さんを止めなくてはいけなくなつた。流石に面倒だ。

……次は全部美琴ちゃんに任せようかなあ。

しかしこれようやく、レヴェルアップ幻想御手事件は終焉を向かえた。

そして、ぼく達は自分たちの戻るべき場所に戻っていった。

安心院なじみ

木山との戦いを終え、自宅に帰ってきたのだが今、ぼくはとても可笑しい光景を見ている。

「お邪魔してるよ、戯言遣いくん。」

「……………」

「おいおい。何を黙っているんだい、戯言遣いくん？」

可笑しい光景とは、巫女服を着た見た感じ女子高生（何故かいるんな所に螺子が刺さっているが気にしない）が上がり込んでいた。

ふむ、哀川さん以外にも不法侵入を平然とする輩がいるとは……………。

しかし、この女は一体何なんだ？

「何か言ってくれないと分からないじゃないか戯言遣いくん、いや……………くん。」

「……………ッ!？」

なんで、ぼくの知らない人間がぼくの名前を知ってるんだ!？

「……………貴女は一体何者ですか？鍵を掛けた筈なのに何でぼくの家に勝手に上がり込んだりしてるんですか?……………それ

「なんでぼくの本名まで知ってるんですか？」

「ははは。×××××くんは矢継ぎ早だなあ。」

「答える！」

ぼくは珍しく声を荒げている。

「はあ、少しは落ち着けよ戯言遣い。それにそんなに焦らなくとも答えてあげるさ。」

そして彼女は語りだす。

「僕の名前は安心院^{あしむ}なじみ。親しみを込めて安心院^{あんしんいん}さんと呼んでくれ。よろしくね。あ、君のことは大概は知ってるからきみの自己紹介はいらないからね。」

「で、安心院^{あんしんいん}さんはぼくに何の御用ですか。」

「いやさ、ただ単にいつの間にか貸し出されていた『^{オールフイクション}大嘘憑き』を返してもらおうと思っ^{ハンドレッド・ガントレット}てね。まあ正確には『手のひら孵し』を、だかね。」

「その言い方だと貴女には他人に貸し出せるほどたくさんの能力を持っていると聞こえますけど。」

「いやあ実に君は優秀だねえ。あれだけの会話でそこまで予測できる人はほとんどいないぜ？ふふつ————いいよ、トクベツに教えてあげる。そうだよ僕には他人に能力を貸し出しても、まったく困らないほどの数の能力を持っている。その数しめて1京285

8兆0519億6763万3865個だ。おつと！きみと人吉くん
にひとつづつスキルを貸し出していてあの女にふたつスキルを奪わ
れたから今はたったの1京2858兆0519億6763万386
1個かな？」

と、安心院なじみは自慢げに笑う。

そして数字にぼくは言葉を失うしかなかった。

ぼくは多くても十個や二十個くらいだと思っていた。

しかし実際のところ彼女は——安心院なじみは人の手に余る
ほどの量の能力を所持していた。

……ていうか人吉くんってあの『人吉善吉』くんだったり
するのかなあ。

いや、それはないか。だって人吉くんが出てくるのは『週間少年ジ
ヤンプ』の『めだかボックス』という漫画だし。うん、たまたま名
字が一緒ってだけだろう。きっとそうだろう。……そう
信じたい。

あ、そういえば最近ジャンプ呼んでないやあ。……最後に
見たのはたしか人吉くんが生き返ったところだったかな。ただ前話
を読み損ねたからなんで人吉くんが生き返ったか分からず仕舞いな
んだよなあ。哀川さんに聞いても答えてくれないしさ。ほんとに何
でだろうね。

閑話休題

「何故、貴女有能力であるはずのものがぼくの中にあるんですか？」

「そのことなんだがね、それがこの僕にもまったく分からないんだよ。」

まったく分からないだって？

「そんなにたくさん能力を所持しているのに？」

「そう。こんなにたくさんスキルを所持していても、だ。だがそんな話は後回しだ。先に僕の『手のひら瞬し』を返してもらおうか。」

そう言って安心院なじみは近づいてきた。

そして、おでことおでこをくっ付け、十秒もしないうちに離れた。

「何をした・・・」

「さっきから言ってるじゃないか、ぼくのスキルを返してもらったんだよ。それにしてもこれは実に面白い。大嘘憑きは因果律に干渉する程度のスキルなのに、きみの場合は因果律どころか、絶対値やベクトル向き、ましてや、概念にまで干渉できるようになってるみたいだね。これじゃあ『現実を虚構にする力』どころか『世界をも嘘で塗り固める戯言』じゃないか。はははっ、何をどうしたらこうなるのか僕にも教えて欲しいもんだぜ。」

安心院さんがいろいろ独り言を喋っている間に能力の使用を試みたが、本当に能力を取られたみたいで何も出来なかったし、何も起こらなかった。おでこを当てるだけで能力を回収って、どんな仕組みだよ。しかし、これでぼくは能力も何もないただの一般人になっ

しまった。安心院さんはいまだに「ほんとに何があっただろうねえ」と、感心しているがいつまでも1京の能力を持つ女と同じ空間にいるのは堪らなく怖い。うん、ここはお引取り願おう。

「あのー安心院さん？」

「なんだい、×××××くん？」

「いい加減本名で呼ぶの止めてくれませんか。」

「嫌だ、と言ったら？」

「哀川さん呼びます。」

「あいかわさんってあの『オーバーキルドレッド赤き征裁』の哀川潤？」

「はい、そうですよ。」

「ははっ、そりゃあー困るなあ。うん、わかった。もう、きみを本名で呼ばない。」

こんな人でも人類最強の請負人の実力は知っているみたいで、化物みたいな人でも、さすがに哀川さんは嫌なんだなあ、とぼくは実感した。

「球磨川くんに誓って。」

そのひと言で嘘にしか聞こえなくなっただが。

「・・・・・・・・用が済んだならそろそろ帰ってもいいんじゃない？」

「んー、それもそうだね。じゃあ僕は帰るとしようか。」

そう言つて、安心院さんは玄関に向かって歩き出した。

よかった・・・帰ってくれるみたいだ。これでこれ以上余計な気を回さなくてよくなるな。

・・・・・・・・あ！これだけは聞いておかなければいけないことがあつたの忘れてた！

「安心院さん最後に一つだけいいですか？」

「・・・・・・・・いいよ。答えてあげるからなんでも聞いていいぜ。ただし、手早く頼むよ。」

「最初に質問したんですけど、何故、安心院さんはぼくの本名を知っていたんですか。それも貴女のスキルか何かですか。」

「何だそんなことか・・・・・・・・。」

そんなことかつて、ぼくには結構重大なことなんだけどなあ・・・・・・。

「教えてもらったのさ。」

「教えてもらった？一体誰にです？」

と、いうことはぼくのことを少なからず知っていて、情報収集に長

けた人ってことになるけど………あ、なんとなく分かってきたぞ。

「人類最強の請負人、哀川潤さ。」

やっぱり哀川さんか……。…というか、なに人権侵害してんだよあの人は………。

「まあ、情報料としてスキルをふたつほどを有無を言わずに奪われたがね。」

……。…そりや哀川って名前聞いただけで警戒するわけだ。

というか、他人のスキルを奪ってまでなにがしたいんだかぼくには皆目見当もつかないな。

「ひとつは無くても別にいいスキルなのだが、もうひとつの方は1京分のスキルの中でも重宝していたスキルでね、『無効脛ライフゼロ』というスキルを無効化するスキルを奪われちゃった。———おっと！ ついつい話し込みしまったけど、帰る途中だったの忘れてたぜ。」

そして安心院なじみは再び歩みを進めた。

「じゃあね、戯言遣いくん。またどこかで会おうぜ。」

そう言って安心院なじみはぼくの前から姿を消した。

あ、どうやって鍵を掛けた部屋に入っ
たか訊くの忘れてた・・・

安心院なじみ（後書き）

ただ、安心院さんを出したかっただけです。

後悔はしてない。

夏の悪夢

「どうしようかなあ。」

今、ぼくの周りに少しばかり問題が起きている。
その問題とは……………

「おーい、いっくん！こっち来て遊ぼーよーっ！」

手を振る涙子ちゃん。と、

「水が冷たくてー、気持ちいいですよー！」

両手をぶんぶんと勢いよく振る飾利ちゃん。そして、

「もたもたしてないで早く来なさいっ！」

「お姉さま格好いいですわ！」

むすっとした顔でこちらを睨む美琴ちゃんと、その美琴ちゃんを尊敬と艶めかしい目で見る黒子ちゃん。

ぼくがこの四人と一緒にいるのはいつもの事だけど、最初に言ったように問題があつて、四人が四人とも水着姿であるという点である。そして何よりも問題なのが、ぼくも水着姿なのだ。

……とりあえず、

以下回想

安心院なじみに大嘘憑きを回収されてから三日がたった。
あじむ オールフイクション

哀川さんに大嘘憑きをとられたことを報告したら、「べつつつにい
いじゃねえかよ。死ぬわけじゃねえしよ」。それに減るもんじゃ
ねえしさー。」とか言ってきた。

いやまったく良くないですよ、こっちは減るところが無くなったん
ですけど……。

それに、ぼく一応学園都市の能力者の頂点に君臨するレヴェル5の
第二位なんですけど……。能力者の頂点の癖に能力がない
というのはどうしたらいいものかねえ。

逃げるか……。しかし、どこに？それに、学園都市と外部に間
には大きな壁があるのにどうやって？

とか、いろいろ嘆いたりしてたら、いきなり玄関の扉がばあん！
！と勢いよく開いて、そこに

「ひさしぶりだなあ！！」

「ひさしぶりねっ！！」

人類最強と電撃姫が現れた。

実に嫌な組み合わせだった。

というか、戦闘狂コンビという一番在って欲しくないコンビだった。

「……………何か御用ですか……………」

「「ふっふっふ。」」

何か用があるのかと聞いた瞬間二人ともこれだよ……。絶
対僕が被害を被ること考えてるよ……。断言できるね。

「これから水着の写真撮影に行こう!!」

うつわぁ、すっげえ声揃ってる。嫌な感じしかしねえ。

水着の写真撮影かぁ、ぼくは何をさせられるんだろか……。一日中舞台の設置や荷物運びとかならまだマシなんだろうけど、きつと、もつと酷いことがぼくを待ち受けてるんだろうね。

「……で、ぼくは水着の撮影会で何をすればいいんですか？」

「それは撮影場所に行つてからの……。お、た、の、し、み」
「うわぁ、絶対楽しくないことが待ってるよ……。うん、でも抵抗はするだけ無駄さ、素直に諦めよう。ぼくはまだ死にたくない。」

荷物運びとかだったらいいなあ、と思いながらぼくは連行されていた。

今ぼくは水着の試着所にいる。

そして、ぼくは自分にあつた水着を探しているのだが、

「……。哀川さん、男物の水着は何処ですか？」

何故か、ここには女性用の水着しか置いてないのだ。

「ねえよ、そんなもん。女物で我慢しとけ。——あと、あたしを名字で呼ぶんじゃねえ、って何度言ったら分かるんだ。ああん？」

「すみません。……でも！……でも、女物の水着は流石に嫌ですよ！」

「いいじゃねえか、いーたんならきつと着こなせる筈さ！なっ、美琴ちゃん。」

「そうよ、アンタならきつと似合うわ！」

女物の水着を着こなせても、似合っても全く嬉しくないですけど！？

「ちなみに、その場合、ぼくはどのタイプの水着を着ることになるんですか？」

「おっ、ついにやる気になったか！」

いや、やる気になったというより、逃げたらそっちの方が後々面倒な事になるから諦めた、って感じなんですけどね。哀川さんから逃げ切る自信なんてものはないし、……それに対A I Mバーストの時に電話無視した罰の『1週間メイド』が残ってるし、今逃げたら『1ヶ月私服もメイド服』っていうのも可能性はある。もつとやばいのが来る気がするが。

「いえ、逃げるだけ無駄だと悟っただけですよ。」

「そうかそうか、いーたんも少し賢くなったみたいだな。いーたんがこのあたしから逃げようなんざ百年はおせえよ。」

ぼくの場合、百年どころか、三百年以上遅い気がする。

「あつ、そつだそつだ。」

そう言つて哀川さんは真つ赤なスーツのポケットを探り出した。

「何探してるの？潤さん。」

美琴ちゃんは哀川さんに不思議そうに訊く。

「んー、面白いものー。あつれえ、ないなあ。もしかして、愛車の方か？しゃあねえ、取りに行くか。」

哀川さんは独り言をぶつぶつと呟いたと思つたら、いきなり出口に向かつて歩き出した。

「潤さんどこに行くんですか？」

「あー、愛車に忘れもんしたから取りに行つてくるわー。」

ポケットの中にはお目当てのものはなかったらしく、哀川さんはひらりと手を振りながら、外に出ていつてしまった。

ぼくは能力がない上に、隣に美琴ちゃんがいるので逃げるという考えは捨てて、このまま哀川さんを待つ、という行動に徹した。

10分後、哀川さんは片手に小瓶を持って帰ってきた。

「なんですか、それ。」

涙子ちゃんが哀川さんの持つ小瓶を指差しながら質問した。

「んー、これか？これはな、一言でいうなら今日のいーたんのための薬。勿論自作の、な。」

哀川さんはけらけらと自慢げに笑いながらそう言った。

「一応訊きますが、中身はなんですか？」

「簡単に言えば『性別が反転する薬』だ。まあ、ぶっちゃけ性転換薬だな。」

一瞬、本気で逃げようかと思った。

「ちよつ、性転換って！？なんかのイジメですか！嫌がらせですか！そんな事して楽しいんですか！——— あんた等からしたら楽しいんでしょうけど、性転換なんてものはぼくにはまったくメリットがないじゃないですか！」

さつきは抵抗するのを止めたと言ったが、あくまで人として許容できる範囲の話であって、女装ならまだしも、性転換は非常に嫌気がある。・・・いや、女装も嫌だけだね。でも、一度やってしまっているので女装に関しては何も言えない。

・・・・・・・・・・ぼくは、一応必死に反抗したが、それも虚しく無視された。

「ぎゃあぎゃああと文句ばかりで、うるせえガキだなあ。少しくらいは静かにきねえのかてめーは。そんななりでも大学生だろーが。ああん？それにてめーが撮影会に出るのはもう決定事項なんだから諦めな。安心しな、効果は半日で切れる。」

哀川さんは言いたいことを言いたいただけ言って、手に持っていた小瓶をぼくの口に押し込んだ。

小瓶とはいえ、中身は液体でしかもそれが気管に入ったので結果、ぼくは陸で溺れそうになった。

「――何するんですか！危うく死ぬところでしたよ――」

あれ？心なしが声がいつもより高いような気が・・・・・・・・・・それに、胸辺りが重いし、少し膨らみもある気がするし、下半身がなんか淋しい。

――確認中。

・・・・・・・・・・ぼくの体は今、完全にジョセイの物に変わっていました。

「・・・・・・・・・・・・・・・・。」

ええ。

茫然自失ぼうぜんじつしつとしていても始まりませんね。

では、これから戯言遣いは悲鳴を上げます。

せーのっ、

「ひゃあああああああああああああああああああああああああああ
あああああああああああああああああああああああああああっ！
？」

世の中の理不尽さを呪ったような断末魔のような悲鳴を上げてから、
一時間後。

女子みたいな悲鳴を上げてしまっただけで恥ずかしくなりながらも、少し
であるが冷静さを取り戻して息を整ってきたところで、がちゃりと
出入り口の扉が開く。

「どうだ身体の調子は。」

「まあ、大丈夫です。気分は最悪ですけど。」

大方、悲鳴が五月蠅めづめづいから、と理由で試着室を離れていた五人が帰
ってきた。

「てめーの気分なんざどうでもいいんだよ。それより薬の方は――
――おー、成功してるっばいな。よかったよかった。失敗してたら、39度を超える熱と全身の骨を折られ、さらに金属バットでフルボッコにされたような激痛が奔るんだが、本当によかったよかったです。」

と、笑う哀川さん。

冗談じゃねえ！

39度を超える熱と、全身の骨を折られた上に金属バットでフルボッコにされる激痛とか、ショック死するわ！

・・・・・・成功してよかったと本気で思った瞬間だった。思ってしまった。

「・・・・・・。」

女体化してるのは分かっていたはずなのに、呆然としてる美琴ちゃん、黒子ちゃん、涙子ちゃん、飾利ちゃんの4人。

きつとぼくが女体化したのを見て、それからずっとこの調子なのだろう。

正しい反応なのはいろいろ嬉しいけどさ、そろそろ現実を受け入れようね。

美琴ちゃんたちが固まっているのもお構い無しに、哀川さんは悪魔のような笑顔を浮かべている。まるで、これから悪戯するぞ、というかのよう。まあ、その通りなんだろうけどさ。

「さあ、いーたん。ビキニかパレオか選ばしてやる。それが嫌なら

その姿で男物の水着着てもいいんだぜ？」

何という究極の二択！その、逃げ道は薬を飲む前に選びたかった。はあ、男の尊厳なんてものは一切ないんですね。期待なんてしてませんでしたけど。

「自分で選ぶのは少しきついので他の人に委託していいですか？」

悩みに悩んだ末にぼくは他人に選んでもらうという手段を選択した。

「おおー、そうかそうか。いーたんは自ら着せ替え人形となることを選択したか。じゃあ、美琴ちゃんとその他三人はいーたんの水着選びを頼んだぜ。何を選んでも文句はないとのことだ。」

「潤さんは選ばないの？」

いつの間にか復活した美琴ちゃんが哀川さんに疑問をぶつける。

「応、あたしはこれから仕事だ。いやー、実に残念だ。あたしもいーたんの水着姿を見たかったし、泳いだりしたかったんだが、仕事が入ってちゃしゃーねー。」

と言いつつも哀川さんは悪魔のような笑顔を浮かべている。

この人、人を虐めるだけ虐めて後々処理するのが面倒になってきたからって仕事を理由に逃げようとしてやがる。まあ、潤さんがぼく弄りを面倒だからという理由だけで放棄するわけがないので仕事も本当のことなんだろう。

「じゃあな、戯言遣いと愉快的仲間たち。あ、あとで水着姿のいーたんの写真送つといってくれ。宛先はいーたんが知ってるから。」

「わかったわ。そのかわり、潤さんもあのことよろしくね。」

「私からもお願いします。」

「私と初春からも、」

「よろしくお願いします。」

あのこって何のことですか？潤さんは関係してるのにばくだけ除^のけ者されてるのは少し淋しい心境になる。

ナーバスな気持ちになってるばくを潤さんは無視して、美琴ちゃんたちの気持ちにこたえるかのように笑顔を浮かべる。いつものような悪魔のような笑みではなく、魔王チックな笑顔を浮かべていた。

「オーケイ。それに関しては全力で取り組もう。——ではではー、何かいい事あったらそれは全部あたしのお陰。お相手は請負人、『^{オーバーキルドレット}赤き征裁』の哀川潤でしたー」

哀川潤はいつもの事ながら、場を荒らすだけ荒らして帰って行った。

回想終了

で、今に至る。

あの後ばくは美琴ちゃんたちの着せ替え人形と化し、いいように弄ばれた。

ちなみに、ばくの今の格好は、エメラルドグリーンのパレオ（フリル付き）とだけ言って置こう。

「何を考えているのか存じませんが、あまりお姉さまを待たさな

いでくださいまし。」

いつの間にか空間テレポート転移で来たのか知らないけど、黒子ちゃんに注意された。

「ごめんごめん。さ、行こうか。」

そして、ぼくは美琴ちゃん達のいるところに歩き出した。

ぼくの悪夢は始まったばかりである。

夏の悪夢？

美琴ちゃん達と30分くらい遊んでいたら、知らない女の人が今回の撮影の大まかな説明を始めた。

「ではこれから、皆さんは被写体になつていただくのですが、カメラは機械による自動撮影なのでこれといったポーズをとっていただく必要はありません。あくまでも自然体でお願いします。」

それを聞いてみんながみんな、「よかったあ。」と、安堵に息を漏らす。

撮影の為とは言っても誰かに撮られるのは緊張するだろうしね。

ぼくからしても本当によかったよ。赤い人のおかげで女子の格好に慣れているとはいえ、男が女として撮られるのは精神的にダメージが大きすぎるしね。……って、あれ？今回の撮影って結構ちゃんとしたものの？ということは、きちんとした雑誌に載る可能性があるってことか？もしかしくなくても、ぼくいろんな意味でピンチ？……いや、しないけどさ。

「一応聞いて置きますが、撮影場所はここだけですか？もしそうだったらずい少、物足りなくないですか？」

「撮影場所はここだけですが、それに関しては問題ありません。ここは学園都市の最先端技術の集まった場所で、温度、湿度は調整しています。今見ている風景は全て実際に起きているわけではありません。」

「じゃっ、じゃあ『この水』もホンモノじゃなくて、映像ってことですかっ!？」

「はい。詳しくは企業秘密なので教えることはできませんが、今居るここも実際は、ぱつと見、何もなただの広い部屋ですよ。なんなら、見せましょうか？」

「良いんですかっ!？見たいです!」

「あ、はい。あたしも見たいです。」

涙子ちゃんとはかく、飾利ちゃんがやたら興奮している気がするけど、気にしたら負けだと思っので無視した。

「ふふっ、いいですよ。みなさんは初めてなのでびっくりすると思いますよ。」

中邑さんなかむら（責任者）が何かのボタンを押したと思ったら、急に周りの海が無機質な空間に変わった。

全員が「おお——!!」と驚きを隠せないでいる。

ぼくからしてもすごいと思う。というかすごすぎる。マジぱねー、である。

さっきまで見ていた風景が全部、映像とか、ありえねえ。ぶっちゃけ江戸時代からタイムスリップしてきた気分だ。戯言だけだね。

「では、みなさん。存分に楽しんでくださいね!」

お、たった今撮影が始まったみたいだ。……さて、何処に

隠れていようかな．．．．．。

言い忘れてたけど、今の風景はさっきと同じ海、というか、ビーチといった感じなのだけれど、隠れる場所がない．．．．．。

ぼくが隠れる場所がないか、辺りを見回してたら、

「見いーつけたあー。」

「ここに居たんですの．．．。」

美琴ちゃんと黒子ちゃんに見つかってしまった。

まあ、今のぼくには悪魔にしか見えないが．．．．．。

「．．．え、えつと．．．何か御用でしょうか。」

何処からか込み上げる恐怖によるものなのか、思わず敬語を使ってしまった。

「アンタ、あたしたちが被写体やってるときに何処行こうとしてたのかしらねえ。あ、逃げようとしても無駄よ。出入り口は初春さんと佐天さんが塞いでるし、アンタの後ろは黒子がいるからね。」

「ふふふ。」

「ええーとお．．．。」

隠れようとしてました、なんて事を言えるわけがないので必死に逃れるための戯言を考えてみるが、何故かいつもは簡単に浮かぶはずの戯言が出てこない。喉辺りには来てるのにー、という感じではなく、本当にまったく浮かんでこないのだ．．．．．。いったいどうして・

.....

まさか！・・・これがキャラ崩壊というものか？

.....何か違う気がする。

「本当のこと言わないと、あたしの最大電力浴びせるわよ。」

やめてください。今のぼくは能力のない、只の一般人なのでそんなことをされたら死にます。

「黙ってないで答えなさい。言わなきゃ、潤さんに帰ってきてもらうわよ。それでも良かったら、逃げるなり隠れるなり好きにしてください。」

完全に言うしかないよね？言わなきゃ死ぬよね？

.....はあ、言うか。

「.....この姿で写真に写るのはさすがに精神的に辛いので、撮影が終わるまでどこかに隠れていようとしてました。ごめんなさい。」

そう言うてぼくは美琴ちゃんに頭を下げる。

嗚呼、年下に頭を下げるときが来るとは思いもしなかったなあ。チクショウ。

まあ、これで許してくれたら――

「ふうん。そんな事考えてたんだあ。あーあ、折角あたしから潤さんにアンタの罰ゲームはなしにしてあげてくれない？ってお願いしてあげようかと思ってたのに、――そっかそっか何処かの戯言遣いさんは罰ゲームを受けたいんだあ。ごめんねー、分かって挙げ

られなくて。潤さんに戯言遣いさんにはハードな罰ゲームをしてあげてください、って頼んでおくわ。」

許す許さないどころか、悪化しました。社会的死刑宣告です。

「何でもしますから許してくださいっ!!」

「ほう、何でもねえ。」

あ、選択肢間違った気がする。というか、絶対間違えた。だって、美琴ちゃんは哀川さんと同類だったの忘れてたもん。

あー、きつと、あたしと勝負しなさい!という感じだろう。そうなたら、死ぬね。確実に逝けるね。前は^{オルフィクション}大嘘憑きがあつたから死ぬに済んだだけで、今ぼくには死を避ける手段が一切ない。それに対して美琴ちゃんは手加減してると言いつつも、普通なら死ぬような攻撃を当たり前のようにしてくるから今のぼくなら、一発当たっただけで良くて入院込みの気絶、最悪致命傷といったところだろう。

「じゃあ、今からの撮影会はアンタが主演、ってことで。中邑さんにはアンタをメインに撮って貰うように言っておくから、よろしく!。」

「え……、そんなのでいいの?」

「嫌なの(死にたいの)?」

あれ?変な副音声が聞こえた気がする。

……気のせいかな。

「嫌じゃありません。」

いや、実際はメインに撮影というのはものすごく嫌なのだけど、これはこれで死にたいほど嫌なのだけれど、ぼくが雑誌の一面を飾る確立が大きくなるのはとても嫌なのだけれどさ、今の美琴ちゃん今までに見たことのない笑顔なんだけどさ、逆にそれが怖くて怖すぎてつい、了承してしまった。

一瞬だけあの人類最強に見えたし。

「じゃあ、行きましょう（逝きましょう）。」

はい、本日二度目の聞きたくない副音声。君はぼくに恨みでもあるのかい？

「……いや、美琴ちゃんのことだし、特にないだろっなあ。哀川さんよろしくの『ノリ』だろっね。それか、ぼくの反応を見て楽しんでるかの、どっちかだろうさ。流石、哀川さん二号。」

「はいはい。分かりましたよ、戯言遣いは死ぬ覚悟を持って撮影に挑みましょう。」

「いや、死ぬ覚悟まではなくていいから。」

「……………」

こんなグダグダな感じで、ぼくは越えてはいけないような一線を越えた。

以下、悪夢。

「はいはい、こっち向いてくださいーい。」
「……………」

「目を逸らさないでください。滅しますよー？」

「…………すみません……………」

「お、いいですねー。」

「次はこのポーズですー。あ、上目遣いでお願いしまーす。」

「こっ、ですか…………？」

「そうですそうです。」

「いっくん、こっち向いてー。」

「イイよイイよー。」

「いーたんさん、こっちも向いてくださいねー。」

「あ、そっじゃなくてこっちですよー。」

「…………あの……………」

「ほらほら、ぼっとてないで次の撮影に備えていろいろ準備しますから、水着替えてくださいよ。」

「…………だれか助けて……………」

ぼくの願いは無視され、撮影は休憩を挟みながらも四時間続いた。

「はい、今日はありがとうございました。おかげで、いい写真が撮れました。」

「や、やっと終わった……………」

「もう、終わりですか……………、少し物足りません。」

「そーだね……………。物足りないねー。」

撮影が短かったことに文句を言う飾利ちゃんと涙子ちゃん。

いや、君たちは物足りなかったとしても、ぼくは十分満ち足りている。

絶望感みたいなものばかりだけど。

「まあ、わたくしはお姉様の水着姿が見れたのでそれで満足ですね。それよりも、お姉様。そろそろ門限ですから帰りませんと。」

「そうね。あたしも十分遊べたし、帰りましょうか。寮監に怒られるのは嫌だからね。……まだ死にたくない。」

美琴ちゃんが最後、何を言ったか分からなかったけど、心なしか、震えているように見える。

え、常盤台の寮監さんってそんなに怖いのか？
もしかしたら、規則を破った人は容赦なく首をへし折るような人なのかも……。

「——と、言う事ですのでわたくし達は失礼させて頂きますわ。」

「じゃあね。バイバイ。」

そして、美琴ちゃんたちは帰っていった。

「御坂さんと白井さんも帰ったことですし、私たちも帰りましょうか。」

「そうだね。じゃあ、あたし達も帰るとしますか。」

「また、明日会いましょうーおー！」

「バイバイ。」

「じゃあね。」

別れの挨拶を交えた後、ぼく達はそれぞれの岐路に着いた。

今日の出来事は一生、ぼくの記憶から消えないものとなった。

8月30日

―窓もドアもないビル―

そこには赤い女と赤い液体に浮いている人間がいた。

「おい、少し訊きてえ事があるんだがいいか？」

赤い女こと、哀川潤は目の前にいる人物に話しかける。

「なんだ。私に訊きたい事とは。」

哀川潤の前にいる、赤い液体に浮く人間――アレイスター・クロウリーは緑色の手術衣を着て、赤い液体に満たされた巨大な円筒器に逆さまで浸かっており、見た目としては『男にも女にも、子供にも老人にも、聖人にも囚人にも見える』と、いった感じである。ゆえに、『人間』で、ある。

「てめえ、一体何を企んでやがる。」

「はて、何のことかな？私にはさっぱりだ。」

「恍^{とほ}けてやがんじゃないねえ。――安心院なじみ。アレ、てめえが招いたんだろ？」

「流石にばれていたか。やはり、隠し通せるものではなかったか。」

アレイスターは否定せずに、笑った。

「当たり前だ。あの程度の隠蔽工作で隠しとおせると思ってた方がおかしいぜ。・・・もう一度訊くぞ。てめえは——学園都市統括理事会理事長アレイスター・クロウリーは何を企んでいる？」

「・・・・・・・・十三階段。」

アレイスターは唐突にそんな言葉を口にした。

十三階段——かつて、西東天が世界を終わらすために集めた異形の集団、それが《十三階段》である。そして、西東天の宿敵である戯言遣い達との衝突で敗北し、消息を絶ち、再び衝突し、その時に生死不明になり、主なき今、存在しない集団。

「あん？どういうことだ。」

「貴様も知っているだろう？・・・いや、貴様は当事者だったな。哀川潤。」

「たしかに、あたしは十三階段と衝突してるが、だからどうした。・・・まさか、てめえそのかつての十三階段メンバーが学園都市で問題を起こしてるとか言っんじゃないやねえよな。アレイスターちゃんよ。」

人類最強は冗談混じりに言う。

「そうではない。」

アレイスターはそれを否定した。

「そうではないが、似たようなものだ。・・・西東天が生きてこの街に現れた。」

しかし、アレイスターは十三階段が如何この話以上の事実を口にした。

それが、西東天の復活である。

先ほども述べたように、西東天は十三階段の製作者であり、人類最悪の魂の持ち主で因果を追放された人間。戯言遣いの宿敵。そして、哀川潤の実の父親でもある。

「はああ！？生きていたのかアイツは。」

その事実流石の哀川潤でも驚きを隠せない。

「いや、正確には、西東天のバックアップとして作られていた人形に西東天の記憶と、コピーされた西東天の魂がそのまま移植されたもの——言うなれば、西東天とまったく同一の人形がつい、先日起動した、といったところだ。残念ながら本当の西東天は未だに生死不明の行方知らずだ。」

「はつ。親父とまったく一緒の人形ねえ……。そんなことができるのか学園都市の科学者は。とんだ、浦島太郎の気分だぜ。」

哀川潤は学園都市の科学技術に感心してみたが、

「いや、作ったのは学園都市の人間ではない。それどころか、製作者は学園都市とはまったく無縁の人間だ。」

アレイスターはそれを真つ向から否定した。

「作ったのは、蒼崎橙子あおみ けいこという人形師と荒耶宗蓮あらや そうれんという死の蒐集家だ。そして、その二人ともが魔術師だ。」

「魔術師ねえ。じゃあ、親父の人形は一体以上あるのか？ そうだとしたらあの最悪はかなり厄介だぞ。」

「いや、それはない。今現在において器かたを作った蒼崎橙子は生きているが、核の製作者である荒耶宗蓮はこの世にはいない。人形は核がなければ、自分で動くことすら出来ない。」

「・・・そうかい。――で、人形の目的はやっぱ本体と同じで世界の終焉か？」

「おそらくそうだろう。実際、既に人形は十三階段の新しいメンバエルファイヴーを集め始めている。こちらで分かっているだけでも学園都市の超能力者が一人、高位の魔術師が四人、殺し名が一人、呪まじない名が一人だ。」

「ちつ。今回も暴力の世界の連中が絡んでやがんのかよ。あー、面倒くせえ。それにレヴェル5の能力者に魔術師だあ？ 選り取り見取りじゃねえか。しかも親父特有のカリスマ性まで兼ね備えているとはねえ。」

「私としても世界の終わりは防がねばならないのだが、生憎私は円筒器こじから出ることが出来ない。安心院なじみは古い馴染みの好よしで今のところは協力してくれてはいるが、後になって疲れたからと言って、闘い自体の放棄もありえるだろう。そこで、哀川潤、貴様に依頼したい。『どんな手を使ってでも西東天の人形と十三階段を止めよ』と。勿論報酬は貴様の望むだけ出そう。」

その依頼に哀川潤は・・・

「いいだろう。その依頼、請け負ってやる。それにもともと、そういう仕事だしな。」

OKを出した。

「——で、何時から始めればいい？なんなら今すぐやり始めてもいいけどよお。」

「いや、こちらとしても今すぐ動いてもらうつもりだったが、その必要はなくなった。」

「あん？」

「先ほど、西東天から直接宣戦布告してきた。——9月19日、だいはせいさい『大覇星祭』開始と同時に俺は十三階段と共に行動を開始する。心押しておけ、と。こちら、その日に合わせて迎え撃つ。」

大覇星祭——学園都市の全学校が参加する超大規模な体育祭で7日間に渡って開催される。競技内容自体は一般的な運動会と大差無いが、データ収集の名目で競技中の能力使用が推奨されているため、中にはド派手な超能力バトルと化す種目もある。外部に向けたイメージアップ戦略の狙いもあり、開催期間中は一部を除いて外部にも一般公開されている。テレビ中継も行われ、海外にも放送されている。

もし、そんな中で戦闘が行われでもしてみれば被害は甚大であるのは確実である。

「大覇星祭の真っ只中に攻めてくるとか頭おかしいんじゃない？一般人を何十人も巻き込むのもお構いなしってかよ。そういうキャラじ

やなかったはずなんだけどなあ、親父は。はあ、まったく何考えてんだかねえ。それに、その日に迎え撃つってお前、正気か？」

「正気かと問われれば正直なところ私は狂っているだろう。しかし、こちらに必要な『鍵』さえ残っていればそれで問題はない。」

それに高い地位にいる人間など、ほとんどが狂っている、とアレイスターは付け加えた。

「そうかい。まあ、それもそうだな。じゃ、あたしはいーたんに知らせに行くとするわ。隠しておいても必ずばれる事なんだから、早めに知らせておいて損はないだろうしな。じゃあな、アレイスター。」

哀川潤はそれだけ言ってこの窓も扉もないビルから立ち去って行った。

哀川潤が去った後のビルではアレイスターの他に哀川潤とは別に新たな人影があった。

「人形とはいえ、あの西東天は止められそうかい？アレイスターくん。」

新たな人影とは体のあちこちに螺子の刺さっている少女、安心院なじみである。

「止めなくてはいいけないさ。そのために、貴女と哀川潤に来て貰っ

ただだから。それにこちらには幻想殺しやヒューズ・カザキリといったも切り札ある。私の計画が破綻してしまつては元も子もないのでカザキリはともかく上条当麻は必ず動かす。いや、私が動かすまでもなく彼は勝手に動くだろうが。」

「天使の方はともかく、神淨（上条）の子は勘弁して欲しいね。万が一、僕の敵にまわつたら堪つたもんじゃない。彼はこの世に二人しかない——僕を殺せる人間だし、めだかちゃんの様に彼は主人公だからね。僕なんかの様なサブキャラが勝てるわけがないんだよ。まったく泣きたくなるよねえ。何時の時代だつて勝つのは主人公で、負けたり死んだりするのは主人公以外の人間だからね。」

まあ、主人公は一度負けたとしても二度目は必ず勝つし、例え死んだとしても生き返つたりするのがよくあるけどさ。と、安心院なじみはけらけらと笑いながら語る。

「上条当麻に関してまったく問題ないだろう。彼は『困っている人間の味方』だ。故に貴女が学園都市で問題を起こさない限りは万が一は起こり得ない。それに彼は常軌を逸した力を持っているが有効範囲は右手だけだ。そして何より彼は人を殺さないし、殺せない。」

自分の天敵が人を殺せない人間だとわかつて安心したのか、いつの間にか置かれていた椅子に腰掛けた。

「しばらく僕は勝手に動くけど問題ないよね？」

「目的の妨害や敵対しないのならばどう動いて貰つても構わない。」
アレキスターは心の底から心配している事がいくつかある。その内のひとつは安心院なじみの天敵である。

もし、安心院なじみがアレイスターと敵対してしまうのなら、例えアレイスター・クローリーが最強の魔術師だとしても現時点で1京2858兆0519億6763万3861個のスキルを持つ安心院なじみに主人公でないアレイスターでは勝てるわけがないからだ。

「1京のスキルか………。何度訊いても驚くな。」

「当たり前だろう。だって僕はこの世に2人しかいない『ノットイコール悪平等』の内のひとりなんだぜ？」

安心院なじみは誇らしげに言う。

「そろそろ疲れてきたたし僕も帰るとするか。」

「そうか……。——では、人形を討ち取るまで協力お願いします。」

「へーい。わかったよ。じゃあね。ばいばーい」

安心院なじみは自身の能力を使い、窓も扉もないビルから姿を消した。

「ふう。自分より上の存在を相手にするのはやはり、疲れるものだな。」

最強と悪平等という化け物級の相手と一対一で会話を行った緊張からか、アレイスターは疲れた表情を見せていた。

「しかし、疲れている場合ではない。こちら準備を進めねば、学園都市そのものが地図から消えかねない。」

来たる9月19日『大覇聖祭』と『十三階段の進撃』に向けて、最強の魔術師、人類最強の請負人、悪平等という異常で異形で本来組むはずのない3人は仕方なしとはいえ結託し、これから始まるうとしている戦争に向けて準備を始めている。

世界を終わらせようとする最悪はもうそこまで迫って来ているのだ。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6989p/>

とある都市と戯言遣い

2011年9月11日18時54分発行